金剛山

金　剛　山

朝鮮民主主義人民共和国・外国文出版社
2024年

目　次

まえがき

　天下の絶勝を誇る金剛山は、朝鮮の名勝として昔から世界に広く知られている。金剛山は山岳美、渓谷美、展望美、高原や湖水の景色、海上や海岸の景観などを備えている名勝の集合体だと言える。

　金剛山の世にも稀な奇観と神秘な山容について、「石が万の手並みを見せ、水が千の仕草をし、木がまた奇特なので、天下の絶勝がみなここに集まったかのようだ」「金剛山を見ないうちは山水の美しさについて語るな」などといわれている。

　朝鮮人民は、数千年前から代々金剛山を愛し、大切にしてきたが、歴代の封建支配層の搾取と抑圧、日本帝国主義の苛酷な植民地支配のため金剛山の見物など考えることすらできなかった。

　金剛山は、労働党時代になって人民の文化的休養地、世界的な探勝観光地として整備されるようになった。

　本書は、金剛山の名勝や名所にこもっている朝鮮人民の英知と才能と共に風俗を語る伝説とエピソードを紹介する。

概　観

朝鮮東海岸に位置している金剛山は、東西の長さ40キロ、南北の長さ60キロで、その面積は530余平方キロである。

金剛山をなしている岩石は、始生代の片麻岩と混成岩類、中生代の黒雲母花崗岩である。

金剛山の基本的形態は、第3期中新世末にあったアシンメトリックなアップウォーピング運動（傾動地塊運動）によってなされた。

長期間の風化作用と浸食作用によって絶壁や深い谷間、千姿万態の峰や板形、角錐形、角ばった形の石柱をはじめ奇岩怪石が奇妙な絶景をなした。また、朝鮮東海の海食作用と堆積作用によって海万物相、海崖、岩島と湖水、砂場、野原も生じた。

金剛山には、毘盧峰、観音連峰、遮日峰、白馬峰、彩霞峰、集仙峰、世尊峰など1万2000の峰がある。

この峰々には無数の奇岩怪石と渓谷がある。20余の展望台、8の天然石門、複数の石窟などがある。

金剛山には渓谷美を誇る深くて優雅な谷間が多いが、一番美しい所は万瀑洞である。

金剛山地域は降水量が多く、森林が茂り、水量が豊富である。河川や滝、淵の水は花崗岩地帯を流れるので、非常に清いのが特徴である。

金剛山には、有名な4大滝である九竜の滝、飛鳳の滝、玉永の滝、十二の滝をはじめ多種多様な大小の滝が無数にある。

このほかにも、三日浦をはじめとする自然湖水や玉流潭など大小の淵、外金剛温泉と随所に金露水、甘露水、金剛水、参鹿水など薬水（ミネラルウォーター）と泉がある。

金剛山一帯は比較的温暖で、雨や雪が多い地域の一つである。

金剛山には温帯南部系統の植物から亜寒帯性植物にいたるまで多種多様な植物と固有の特産植物が多いので、大自然植物園を思わせる。金剛山には2298種の植物が分布しており、そのうち種子植物およびシダ類は1292種、そのほか胞子植物は1006種もある。

金剛山には、世界的に1属1種のシジミバナ科に属するフサシモツケ、朝鮮の特産植物であるハナブサソウをはじめ多くの特産植物がある。

金剛山には、原始時代の支石と階級社会初期の墓、中世の山城、建物、塔、碑、仏像彫刻、金属および木工芸品をはじめ多くの遺跡・遺物がある。

祖国解放戦争前まで金剛山には朝鮮で随一の大寺刹をはじめ多くの寺が保存されていた。しかし、祖国解放戦争時期（1950・6・25～1953・7・27）、アメリカ帝国主義侵略者の爆撃によって楡岾寺と長安寺、神渓寺をはじめとする数多くの寺が完全に破壊されて址だけが残り、表訓寺の3殿2閣1楼と一つの付属建物、正陽寺の2殿、そのほか宝徳庵と仏地庵、摩河衍の付属建物である七星閣だけが保存されている。

金剛山には、このほかにも仏像、碑、塔、卒塔婆、梵鐘、仏教の絵画、各種の仏具をはじめ数多くの歴史文化遺産が伝わってきたが、日本帝国主義者の軍事的占領時期（1905～1945）にほとんどが日本侵略者に略奪された。

朝鮮人民は、昔から景色の優れた金剛山を、「楓岳山」「皆骨山」「霜岳山」「仙山」「蓬莱山」「涅槃山」などいろいろな名称で呼んできた。

この中でも、あらゆる花が満開してかぐわしい香りを放つ春の金剛山を美しい宝石になぞらえて「金剛山」、峰と断崖絶壁を漂う白雲とうっそうたる森林、いろいろな鳥のさえずり、滝の轟音が響き渡る夏の金剛山を「蓬莱山」、全山が赤い紅葉に染まり、清らかな谷川の水が流れる秋の金剛山を「楓岳山」、全山が雪と氷柱に覆われて特異な景観をなす冬の金剛山を「皆骨山」と呼んできた。

「霜岳」は真白な峰がまるで霜柱のように鋭いという意味で、「仙山」は天界の仙人が降

りる美しい山だという意味で、「蓬莱山」は伝説で伝わる不老草や不死の薬があるという東方国の山の名でヨモギが生い茂っているという意味で、「涅槃山」は山があまりにも美しく、神秘なので無我の境地に入るという意味で仏経から由来した名称である。

金剛山は、山容や名所の形態上の特徴によって外金剛、内金剛、海金剛に分けられる。

外金剛は山の傾斜が急で険しく、峰や奇岩がとがっており、起伏に富んでいるのに比べ、内金剛はほとんどの山容が円やかで地形が比較的扁平であり、山勢も緩やかである。

一方、海金剛はそれらとは違って清らかな湖、奇岩と波が入り混じった海の風景が独特である。

人々はこれについて、外金剛は「男性」の父、内金剛は「女性」の母、海金剛は「穏やかで純朴な娘」と「いたずらっ子の息子」になぞらえたりした。

金剛山が内外に広く知られたのは久しい前からである。

仏教の伝来と共に金剛山は、東方でその「聖地」の一つとして数えられるようになったが、全国各地から集まってくる数多くの僧侶と信者の巡礼場所となって、さらに広く知られるようになった。

7世紀末からは金剛山探勝が国内の上流階級の間で一つの流行となった。

1894年、金剛山を探勝したイギリスの女性ツーリストであるイザベラ・ビショップは、自分の所感について次のように吐露した。

「金剛山の美は世界のいかなる名山の美をも超越している。

これについて書いた文章は単なる目録にすぎない。美の全ての要素で満たされたこの規模の大きい峡谷はあまりにも美しくて、人々の心を麻痺させるほどである」

朝鮮封建王朝末期に駐朝ドイツ領事を務めたクリュゲルは次のように書いている。

「金剛山の雄大な全景、山容の大胆な構成、切り立つ断崖、未だ斧の入れられていない原始林、汚れのない清い滝、早瀬と深い淵から差し出る光線と色彩の変化……、ああ！この世のいずこにこれと比較しうるものがあろうか」

金剛山は、朝鮮労働党の時代に入って人民の金剛山として様変わりした。

金日成(キムイルソン)主席と金正日(キムジョンイル)国防委員長は数回にわたって金剛山を訪れ、人民の文化的休養地、世界的な名勝としてより立派に整備するよう導いた。

昔から百聞は一見に如かずといわれている。

朝鮮の名山—金剛山を訪れる人々は、その恍惚感と壮快感、清新さで胸が一杯になるであろうし、その余韻によって一生喜びに陶酔するようになるであろう。

「金剛山10景」

1. 毘盧峰の日の出
2. 九成洞の紅葉
3. 万瀑洞の水の音
4. 白雲台の霧と雲
5. 万物相の天然彫刻美
6. 九竜の滝の壮観
7. 世尊峰の展望美
8. 十二の滝の高さ
9. 叢石亭の月見
10. 三日浦の船遊び

外金剛

外金剛は、金剛山の主峰をなしている毘盧峰を中心にして南北に長く伸びた連峰と、東海岸に沿って長く広がった海金剛の間を包括する名勝区域である。

外金剛の風景を代表するのは山岳および渓谷の風景であり、その主な特徴は険しく、荘厳で、奇妙なことである。

堡塁峰、世尊峰、彩霞峰、玉女峰、千仏山、天仙台、九竜台、温井嶺、開潺嶺などの鋭くて雄大で、力に満ちた峰や山、展望台、千姿万態の奇岩怪石、九竜淵渓谷と寒霞渓など有名な渓谷、それに大小の滝と淵が調和して美しい絶景をなしている。

外金剛には11の名勝区域がある。

温井区域

温井区域は、寒霞渓谷の始まる温井川のほとりに金剛山温泉があることから名付けられた区域である。

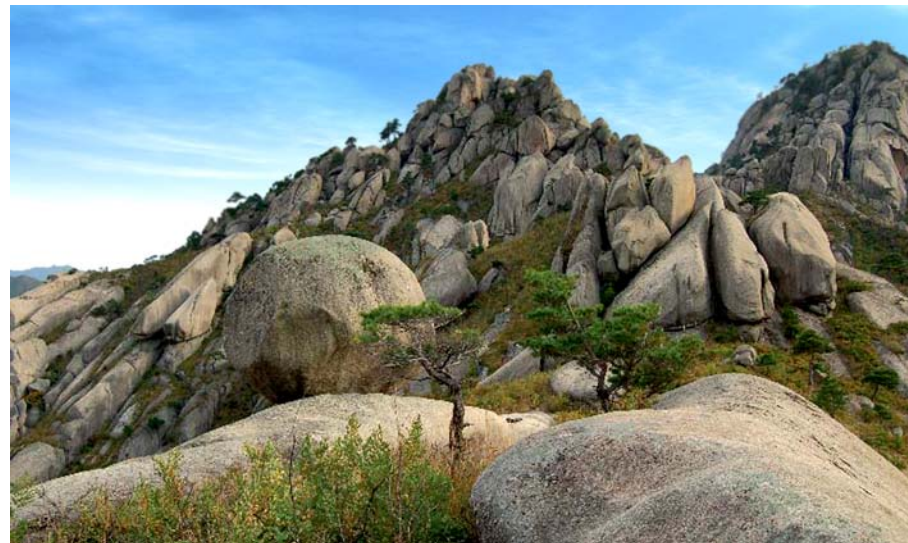
温井区域は金剛山探勝の中心区域である。重畳する奇岩峻峰に取り囲まれており、真ん中の温井川のほとりにマツやチョウセンゴヨウが生い茂っていて、特色のある風景をなしている。

ここから高城港と内金剛、三日浦と海金剛、楡岾寺、九竜淵へ行く道が伸びているとして金剛山関門といわれている。

温井里の北西方には鷹岩山（233メートル）があり、ここには鷹、猫、鳥、スッポン、オットセイなど動物の形をした岩がある。その中には四方が見渡せる鷹の形の岩もある。鷹岩山の傍らに朝鮮東海の日の出を見物するにうってつけの大慈峰がある。

鷹岩山の南側の向こうには、扁平な岩の上に楕円形の巨大な卵岩が乗せられている卵岩山がある。昔、ある豪傑が卵を食べようとこの岩に這い上がるヘビを刀で殺したという話が伝えられている。この卵岩は、1980年1月、天然記念物第217号として指定された。卵岩の南側に望燧峰があるが、かつて外敵の侵略を

鷹岩山

卵岩山

監視していた所である。海抜は289メートルである。温井区域の西側にある温井川のほとりに金剛山温泉がある。金剛山温泉はラジウムを含む鉱物質珪土温泉で、温度37～44度の微弱な放射能をもつラドン泉である。色がなく透明であり、セッケンがよく解ける。この温泉は、結核性でないいろいろな原因の慢性関節炎、各種の神経痛疾患、心臓障害、高血圧症、脊椎疾患、慢性炎症疾患をはじめいろいろな病気の治療に利き目がある。

温井里にはこのほかにも温井里古城がある。この城は高句麗（BC277～AD668）時代に築城した。

城は高くない小山に位置しているが、周辺の尾根に沿って築城した。

地形をよく利用して築城したこの城は、外から入ってくる場合、初めは城が峰に隠されて見えないが、突然城壁が現れて近づく敵を峰と城壁の間で一挙に掃滅できるようになっている。

城壁の周りは530メートル、高さは3～4メートルである。城壁は手入れした30～40センチの石で継ぎ目がないように積み上げた。

九竜淵区域

九竜淵区域には、外金剛の随一の景色として知られた九竜の滝と九竜淵、上八潭、飛鳳の滝と珠簾の滝、連珠潭と玉流潭など有名な滝や池が集中している。

この区域は、世尊峰と玉女峰、観音連峰の間の長い渓谷を包括する名勝区域であり、神渓寺址のある一番下の谷間から神渓洞、玉流洞、九竜洞地域に分けられる。

神渓洞は、援護峠を越えて九竜淵渓谷の入り口から金剛門までの名所を包括する。

この谷間の入り口には倉址松田、神渓寺址がある。谷間の奥にはモンラン館とモンラン橋、船潭、カエル岩、ウサギ岩、亀甲船岩、スッポン岩、天帝岩などの奇岩怪石がある。また回想台と参鹿水がある。

神渓洞の入り口の神渓川のほとりに神渓寺がある。

519年に建てられた神渓寺は、楡岾寺、長安寺、表訓寺と共に金剛山4大寺の一つとして知られている。飛び立つような入母屋造りの屋根になっているので、涼やかであっさりして見える。

神渓寺の大雄殿区域の庭に金剛山の3大旧石塔の一つである神渓寺3層塔がある。

塔は2段の基壇と3層の塔身からなっている。高さは3.35メートルであり、基壇の一辺の長さは2.27メートルである。

神渓寺

神渓寺の3層塔は、建築構造的に下は広くて重く、上は狭くて軽く積み上げて、荘重でありながらも高い感じを与える視覚的効果が優れた建築物である。

神渓洞の峠を通ると石の屏風のような集仙峰が見えるが、その頂にあたかも1羽の親鳥が餌をくわえてきて巣で嘴を差し出した子鳥に食べさせるかのような形の岩が目につく。

親鳥が子鳥をとても可愛がるという意味で慈雛岩、愛の岩と呼ぶ。

慈雛岩を少し通って振り返れば、集仙峰の頂の愛の岩の左側に空が見える穴が開いている。「竜出口」（「竜が出た跡」）、または「竜が開けた穴」ともいわれる。

この穴は昔、金剛山を守っていた9匹の竜が西域から来た53仏と戦うときに力比べをし、芸を見せていた痕跡だという。

神渓川には船の形をしたとして船沼と呼ばれる小さい池がある。船潭とも呼ばれる。温井村から九竜淵へ行く小高い峠を、船沼のある所だとして船沼峠、あるいは船潭峴ともいう。

昔、仙人が住んだとして神仙台と呼ばれる岩のある区域には、朝鮮の特産植物であるハナブサソウと珍しい野生花弁である松葉百合、スイセン、クロフネツツジなどが1キロの区間に育っている。

金剛門から珠簾の滝と銀糸流の合流点までを包括する地域が玉流洞である。

水晶のように清い水が珠になって流れ落ちるとして玉流洞と呼ばれている。有名な滝と淵、奇岩怪石がある玉流洞は、金剛山で渓谷美を誇る所である。

伝説によれば、昔、4人の仙人が天花台の天渓花を見るために船に乗って玉流洞まで来たという。船を係留し、天花台に上って東西南北を眺めていた彼らは、天下の絶景に魅せられて歳月が流れるのも知らずにいた。そのうち、玉流洞に係留した船は沈んで玉流潭に変わったという。

玉流潭の広さは600余平方メートル、深さは5～6メートルである。金剛山の多くの淵の中で一番大きい。

天花台

この淵の上に長さ50メートルの玉流の滝がある。

玉流潭の前の小川の真ん中に、数十人が囲んで座れる扁平な岩がある。

連珠潭は二つの青い珠をつないだようだとして付けられた名称である。上の小さな淵は幅6メートル、長さ10メートル、深さ6メートルほどであり、下の大きな淵は幅9メートル、長さ30メートル、深さ9メートルほどである。

連珠潭の上に薄い絹布を軽く垂れたような連珠の滝がある。水量が多いときは、壮快な滝となって流れ落ちる。連珠潭と連珠の滝は水色が清く、その形が特異であり、その周辺の森とよく調和して玉流洞の谷間でも独特な風致を見せている。天然記念物である連珠潭には、昔、天女が落としたという二つの珠が池になったという伝説が伝わっている。

天然記念物として指定された飛鳳の滝は、金剛山の4大滝の一つである。世尊峰の中腹から段々になっている岩壁を伝って流れ落ちているが、その高さは165メートルである。

玉流潭

滝の水から飛び散る水煙が旋風によってひらひら舞い上がるのが、あたかも鳳凰が長い尾を振りながら空へ舞い上がる姿のようだとして飛鳳の滝という。

ここを訪れたある外国人は、この滝を見て「これは自然が生んだ神秘な幻想のような景勝であり、驚異的な美の極致」だと感嘆した。人々は昔からこの滝について、落ちれば滝であり、流れれば絹布であり、散れば珠であり、溜まれば淵であり、飲めば薬水だと賛辞を惜しまなかった。

飛鳳の滝

外金剛

飛鳳の滝の右側に舞鳳の滝がある。滝が段になっている岩にぶつかって泡と水煙を起し、幾度か大きく巻いて落ちる模様があたかも鳳凰が踊りを踊るようだとして舞鳳の滝という。滝の下から見上げれば、滝と峰、渓谷と層岩絶壁、木と水、花卉は互いに調和して立体的な美しい絶景を表している。神秘なこの玉流洞の谷間には、健康薬草として広く知られたキキョウがたくさんある。

空に咲いた白い花房のようにいくつかの奇峰が重なり立っている天花台は、見ようによってはオオヤマレンゲの花を掛けておいたようでもあり、白玉を槍や剣に作って刺し込んだようでもある。

天花台から北側に見える岩は、クマやウサギが向かい合っているような形であり、これらの岩には勤勉なウサギと怠けもののクマについての伝説がある。

天花台の頂に、夫婦が立ち並んで探勝客を送迎するような形の岩があるが、この岩が夫婦岩である。

橋を渡る人々があたかも踊りを踊るようだとして舞踊橋と呼ばれる橋を渡れば九竜洞に入る。

九竜洞は、舞踊橋の下の合流点からその上方の九竜の滝と九竜淵、上八潭のある谷間である。

九竜洞には銀糸流、珠簾の滝、九竜の滝、九竜淵、上八潭、九竜台、飛竜台、毘沙門、世尊峰などの名所がある。

九竜台の北側の玉女峰の谷間には、岩の間を細い銀糸のように流れ落ちる小川があるが、それを銀糸流と呼ぶ。

九竜の滝は、金剛山の4大滝の中で第一の滝である。休みなく流れ落ちる滝の水は、あたかも空の天の川ごとき銀色の霧が立ち込めたようである。

滝の高さは74メートル、幅は4メートルである。

滝を取り囲んだ絶壁は中生代黒雲母花崗岩からなっている。天地を揺るがすような滝の轟音、無数に砕けて億万の真珠をなした水滴、断崖に千丈の白絹を垂らしたかのような力強い水柱、そこに根ざした虹が調和して壮快で雄大な、かつ威圧的な気概や美しさにより天下の絶勝をなしている。

天然記念物として指定されている。

滝が落ちる下にある臼のような池は九竜淵であるが、水深は13メートルである。ここには、昔、楡岾寺の淵で53仏と戦った9匹の竜が棲んだという伝説がこもっている。高い崖から落ちる滝の水は、谷間中につむじ風を起こし、冷たい水滴が飛び散

九竜の滝

世尊峰

り、大きな水柱が頭上に落ちるようである。

それゆえ、昔の詩人は、

雷光満壑(谷間をとどろかす雷なのか)

気呑滄溟(東海を呑みこみそうな荘厳な気概)

蒼谷落河(青天から天の川落ちるか)

白日吁雷(白日に雷鳴けたたましい)

怒瀑中瀉(怒った滝恐ろしく落ちて)

使人眩転(見る人の目を見張らせる)

と、九竜の滝を詠っている。

3人の身障者の伝説

昔、目と耳、足の不自由な3人が病気を治そうと神渓寺で百日間も供養したが、病気は治らなかった。それで、せっかく来たのだから金剛山の見物でもしようと合意した。耳の聞こえない者は歩けない者を背負い、その後ろの目の見えない者は杖を突いて探勝をしたが、時はうららかな春なので、色とりどりの花が咲き誇り、小川のせせらぎと鳥のさえずりなどが一つに溶け合った金剛山は見ること、聞くことが天下の最高だった。やがて彼らが九竜の滝にたどり着いたとき、濃い霧が晴れながら壮大な姿を現す滝の恍惚たる雄姿にびっくりして、3人の身障者は耳が聞こえ、目が見え、起きて歩けるようになったという。

九竜の滝の上の谷間に、青い珠をつないだように段々に並んでいる八つの大きな淵があるが、それが上八潭である。ここの夏には濃い緑に覆われ、水量の増えた滝が休みなく流れ落ちて霧雲を漂わせ、秋には木の葉が赤く色づいて美しさをいっそう際立たせる。ここには、景色に魅せられた天女が下りてきて水遊びをして上がったという「金剛山の八天女」の伝説がこもっている。

九竜淵から毘盧峰へ上がる道に毘沙門という天然石門がある。石門の上に高くそびえている毘沙岩は、あたかも本を積んでおいたかのような形をしている。学者は「本岩」と言い、空腹の人はトク（餅）あるいはパンを積んでおいたようだという。九竜淵区域と仙下区域の間に高くそびえた壮大な峰が、世尊峰である。世尊仏になぞらえて付けた名称である。峰の頂は、扁平な屋根状である。樹齢数百年の松とつる植物などがあるが、激しい風によって松、チョウセンゴヨウ、コノテガシワ、ハリギリがまっすぐに育たず、這い木のように育ったり低木のように育ったりする。上八潭の上にある淵を亀潭、または九沼谷と呼ぶ。

上八潭

万物相区域

山岳美を代表する万物相区域は、切り立つ層岩絶壁とよろずの姿をもつ奇岩怪石によって、特異な自然風致と天然の彫刻美を誇っている。

この区域には、万物相と寒霞渓、万相渓など有名な絶景がある。

昔、金剛山の万物相地区を見て回ったある文人は、万物相の絶景を指してこう描写した。「岩が鋭く、切り立っている。上へ上るにつれて奇怪な峰と険しい奇岩が群れをなして目の前に迫る。軽快なものは今にも飛び立ちそうで、とがっているものはすぐにも折れそうで、密集

しているものは互いに親しそうで、太ったものは鈍そうで、痩せたものは敏捷そうな千姿万態は筆舌に尽くしがたい」

寒霞渓とは、冷たい霧が立ち込める独特な景色の渓谷という意味である。

寒霞渓には、壮大な山容によって有名な観音連峰がある。

上観音峰(1132メートル)、中観音峰(892メートル)、下観音峰(458メートル)が連なっていることから観音連峰と呼ばれる。

ここには老丈岩、熊岩、六花岩、将帥岩などの奇岩と紋珠潭、観音の滝、六花季節の滝など多くの名所がある。

熊岩は、中観音峰の中腹の絶壁の上にある熊形の岩である。

伝説によると、昔、毘盧峰渓谷に年老いた熊が棲んでいた。

冬眠から覚めたある日、腹がへった熊は、餌を求めて水晶峰の日向に向けて中観音峰を越えているとき、小川の水音を聞いた。

万物相

見下ろすと、清い水を通して紋珠潭の床に敷かれている玉のような小石が昨年に落ちたドングリのように見えた。熊は一気にドングリを食ってしまう考えで崖から飛び降りたが、絶壁の中腹にある岩の裂け目に足がはまって身動きが取れなくなった。愚かな熊は尻を岩に付けたまま、ドングリをほしがって、首を長く伸ばして紋珠潭を見下ろしていたが、いつの間にか歳月の流れと共に石となって固まってしまったという。

熊岩

中観音峰渓谷の絶壁から流れ落ちる高さ20メートル、長さ43メートル、幅4メートルの滝が観音の滝である。

岩の裂け目に石一つが挟まれており、その石の上に水が流れ落ちる奇妙な滝である。四季にわたって干上がることのない滝である。

紋珠峰の中腹に、まるで虎がうずくまって見下ろすかのような虎岩がある。

伝説によると、昔、万物相渓谷に棲んでいた虎が餌を求めて紋珠峰を下りる途中、月光に彩られた金剛山の景色に感嘆して詩を詠む人を見た。金剛山の景色に魅せられて寝食も忘れているその熱情的な姿に感動した虎は、金剛山の獣として、あの人のようにこの山を熱愛しなかった自責に駆られて顔を赤らめ、うずくまったまま岩に変わったという。

温井村の西側にある、まるでこの世のあらゆる形態の物を一カ所に集めたような山が万物相である。

万物相には勢至菩薩の名を冠

した高さ1025メートルの勢至峰がある。

この峰にある展望台は、海を見渡すに適した所として有名である。勢至峰とその山脈には絶壁と、竹の子のようにそそり立った奇岩が数多くある。

童子岩、燭台岩、駱駝岩、子馬岩、馬岩があるが、この岩にまつわる話が伝わっている。

昔、3人の子どもが義兄弟の契りを結び、ここに来て蝋燭を灯して、昼夜を分かたず一生懸命勉強していた。山中の動物が蝋燭の灯火に引かれて集まってきたが、勉強中の子どもたちを見て、勉強に邪魔になってはと思って散って行った。気の短いものは先頭に立ち、のろいものは残って石に変わったのが今の童子岩、燭台岩、子馬岩、馬岩である。

万物相の入り口の左側に並んでいる三つの岩を三仙岩と呼ぶ。三仙岩は天然記念物として指定されている。

「三仙岩」の伝説

昔、山水を楽しむ3人の仙人が名勝を歩き回り、最後に金剛山に上った。内金剛、海金剛の名所をことごとく見て回った仙人たちは、寒霞渓を通って外金剛の万物相の入り口に着いた。

山全体に雲が立ち込めて万物相の自然景観を見分けることができなかった。しばらくして風に吹かれて瞬く間に雲が消え去り、万物相の絶景が現れ始めた。万物相の景観に感嘆していた仙人たちは、絶景を満喫しようと高い峰へ上り始めた。

そのとき、急に万物相渓谷から空に虹がかかり、天女が虹に乗って万物相の天仙台に降りた。仙人たちはうっとりとして、峰に上ることも忘れてしまった。

そのうち、夕日が西の山に沈み始めた。

きびすを返してしばらく山を降りていた仙人たちは、みなよそに行く必要がない、ここに住みながら天女たちを迎える方がいいだろうと合意した。3人の仙人が万物相の入り口に着いたとき、意外にも万物相見物に来る鬼神たちと出会うようになった。鬼神たちは仙人たちを見ると逃げ出した。そのとき、すばやい一人の仙人が醜い一鬼神をつかまえたが、その鬼神が石となって固まったのが「鬼面岩」であるという。

3人の仙人も万物相を守る武士のように石となって固まったが、それが「三仙岩」であるという。

三仙岩の西北側に天然記念物として指定された鬼面岩がある。

一つの丸石を頭に載せて立っている鬼神の面を思わせるが、奇異で神秘な姿を表している。

天仙台に上る道に忘杖泉という泉がある。この水を飲めば力が湧いてきて突いていた杖さえ忘れて、一気に天仙台に上るという。

勢至峰山脈に節婦岩という岩があるが、力持ちが大きな斧で振り下ろしたような深い跡がある。

三仙岩

外金剛

節婦岩には金剛山の景色を刺繍するために地上に降りてきた天界の天女と若いきこりの恋愛談を伝える伝説がある。節婦岩を通って70～80度の傾斜をくねくねよじ登ると、鞍のように見える台に着く。

急傾斜の険しい道を通ってここまで上がったり、逆に天仙台からここまで無事に下りると気が休まるといって安心台と呼ばれた。

高さ936メートルの天仙台は、金剛山の景色に魅せられた天女が降りてきて遊んだという所である。10余人が十分入ることのできるこの展望台は、天然記念物として指定されている。

天仙台から北側の下を見下ろすと、数十メートル離れた崖の中腹に石臼のような二つの丸い水溜まりがある。

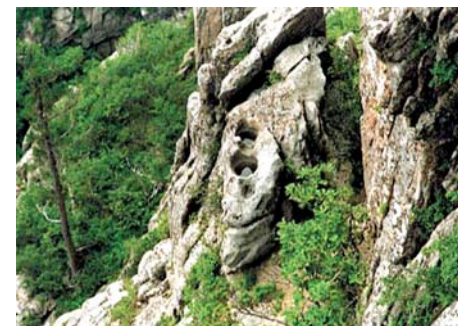
鬼面岩

節婦岩

天仙台

天女の化粧水が溜められているとして天女化粧湖と呼ばれる。

大きな水溜まりの両側には、白粉箱と口紅を置いた所とも言える水のない二つの小さな窪みがある。

ここには昔、天女が上八潭に降りて水浴びをし、化粧湖で化粧した後、天仙台で箜篌を弾きながら楽しみ、虹に乗って天に上がったという話が伝えられている。

天仙台から安心台の方に下りて、分岐点から右側に200メートルほど進むと、後高台がある。ここで天仙台を見てこそ、本当に天女が降りたという伝説がうなずける。特に、

天女化粧湖

夕方に西に傾く日が天仙台に対角に反射するとき、天仙台と蓬田山の月光は、金剛石の光彩とも言えるほどまぶしい。そして白い雲と薄い霧に包まれると、蜃気楼を見るような気がする。

万物相の展望台の一つである主峰台から万物相の奇峰を眺めると、その一帯のそそり立つ峰々が一目に見渡される。

天仙台から見た景色とは違って奇岩怪石が突っ走るようであり、水晶のような岩は金剛山の精気を放つようである。

ここでは、雲と霧、陽光によって、そのつど変わる景色を見ることができる。

主峰台で安全はしごを利用して200メートルの断崖を上ると、天海観に着く。

ここでは空と海が一目に見渡される。天海観から広々とした朝鮮東海を眺める趣はすこぶる独特である。

天海観の右側の坂道を100メートルほど上がると、望洋台の第1展望台に着く。

ここでは、毘盧峰と寒霞渓谷の観音連峰、千仏洞の連峰をはじめとする高低の峰々、その渓谷を絹布のように流れる水などが一目に見渡される。

第1展望台から東の方へさらに上ると、第2展望台にいたる。勢至峰の頂にあるので勢至峰展望台ともいう。

ここでは、海金剛一帯と水晶峰一帯の峰々と千仏洞の裏側が見渡される。

水晶峰区域

水晶峰区域は、天然水晶があることから特異な景観を見せる名勝区域である。

ここで出る水晶は金剛山の天然記念物として指定されている。

高さ773メートルの水晶峰の岩にはいろいろな色の水晶が宝石のように嵌められており、昼には日光に照らされてまぶしい金色の光を放ち、夜には月光に照らされて夜光の珠のようにきらめく。

ここにはスッポン岩、鳩岩、仙睡岩、水晶門、降仙台、金剛窟など名勝が多い。

水晶峰へ上る道端にある大きな石門を水晶門という。金剛山の石門の中でも一番大きい石門の一つである。厚さは2〜3メートル、高さと幅はそれぞれ10メートルほどであり、一枚巨岩のアーチ型石門である。

水晶峰の北東側には、まるで鉢を伏せたような一枚巨岩となっている高さ488メートルの鉢峰がある。およそ1000人が座っても十分であるほど広い岩に大小のいろいろな窪みがあり、そこに雨水が溜まる。真鍮の食器を伏せたようだとして「鉢峰」という。

数多くの窪みが釜のようだとして百鼎峰ともいう。また、雨水によってうがたれた溝がまるでチマ(スカート)につけたひだのようだとしてチマ岩ともいう。

鉢峰へ上る道端に金剛窟がある。金剛窟の奥に金剛水という泉がある。

水晶峰

仙霞区域

仙霞区域は、集仙峰と彩霞峰、集仙峰と世尊峰、彩霞峰と世尊峰の間を包括する名勝地域である。

集仙峰と世尊峰の間にある名所を包括する地域は、動石洞と呼ばれる。

昔、仙人が遊んだとして遊仙亭とも呼ばれ、フンドル岩谷ともいわれる。

世尊峰の麓にフンドル岩（動石）という岩がある。

数十トンもある岩だが、テコを入れるとすぐにも動き、揺れそうである。フンドル岩はそのものが面白い上に、景色も優れているので有名な岩である。赤黒色、白色、褐色を帯びた岩の間にカエデ、ミズキ、クヌギの林が広がっており、赤色、黄色、柿色に彩られるときの渓谷は本当に素晴らしい。フンドル岩の傍らに動石潭がある。

集仙峰と彩霞峰の間にある仙霞洞には伏せ滝である合流点の滝、薄い絹布を垂れたような連珠の滝と青い珠をつないだような連珠潭をはじめ千

動石

里馬岩、亀甲船岩、竜船岩などの名所がある。

連珠の滝の上にある白連の滝の上と下に、亀が首を長くして伏せているような二つの亀岩がある。そして世尊峰の東側の斜面頂点には船そっくりの船岩がある。

この亀岩と船岩には、金剛山の景色に魅せられて竜宮に戻れなかった亀の兄弟の伝説がある。

伝説「竜宮に戻れなかった亀の兄弟」

遠い昔、千甲子(6万年)の誕生日を数日後にひかえた東海の竜王が臣下たちを呼び寄せ、宮女たちに白い絹布で衣服を作って着せ、誕生祝いを盛大に催すようにと言い付けた。

このとき、亀の兄弟が東海に接している名勝に白い絹布が多い、それを手に入れて差し上げる、と申し出た。

竜王は、その場で大きな1隻の石船を用意し、臣下たちに雲と霧を起こして2匹の亀を石船に乗せて送るよう命じた。

白連の滝に着いた2匹の亀は、白い絹布を手に入れて帰ろうとせず、白い絹布がひっきりなしに流れ落ちる光景に魅せられてそこを離れることができなかった。そのうち亀の兄弟は長い歳月が流れるにつれて石となってしまったという。亀の兄弟が乗ってきた船は岩となって今も山腹にあるという。

彩霞峰は鋭いのみのようにそそり立つ奇岩怪石に覆われており、中腹に険しくて高い断崖に流れ落ちる30～40メートルの彩霞の滝がある。

仙下渓の奥にいたると、奇岩絶壁の中央を流れ落ちる仙下の滝が素晴らしい景観を繰り広げる。

彩霞峰の第3展望台である彩霞高台からは、彩霞峰の西南方の複数の峰と松林谷、万景谷の渓谷が一目に見渡される。

彩霞峰の東側には、昔、仙人と天女が集まって遊んだという集仙峰がある。金剛山で最も鋭い峰である集仙峰は一枚巨岩になっていて、一本の松も根を下ろせなかった。

鉢淵沼区域

鉢淵沼区域は集仙峰の東側にある霊神洞と鉢淵洞渓谷、その周辺の名勝を含む地域である。

集仙峰の東側にある霊神洞は朝鮮東海を展望するによい所である。ここに霊神庵という古い寺があった。

霊神洞には、高さ10メートルの前奏の滝をはじめ五段の滝、竜淵の滝、騰竜の滝、霊神の滝がある。

集仙峰の東側の高峰の下に人間の形をした岩がある。

あぐらをかいている姿が、あたかもおとなしい人のようでもあり、仏像のようでもある。昔、僧侶たちはそれを「仏像岩」と呼び、この谷間に霊神庵という庵を建て、仏教を宣伝した。

霊神洞渓谷の南側にある集仙峰の東南側の傾斜面には、昔、鉢淵寺という寺があった。その渓谷を鉢淵洞という。

この地域には鉢のような形の小さい池をはじめ長さ60メートル、傾斜約40度の伏せ滝があり、その上に滝岩がある。

滝岩を過ぎてしばらく上ると、広くて長い平岩がある。その岩は、幻想の美しい鳥である鸞鳥と鳳凰が月桂樹に止まっている様子を彷彿させるとして桂樹鸞鳳岩と呼ばれる。

桂樹鸞鳳岩の下にある二つの桂鳳沼から左側に分かれる小さい渓谷の入り口に、自然洞窟である鉢淵窟がある。

この渓谷の左側の小高い山頂に、あたかも大きな1羽の鳥が止まっているように見える桂樹台という奇妙な岩がある。

鉢淵寺址の前にある鉢淵寺の虹の橋は、高麗時代(10世紀～14世紀)に築造されたもので、朝鮮の現存の石橋遺産の中で最も古い石橋の一つである。鉢淵川の両側の岩盤を礎石にし、そこに精巧に加工した石を垂直に数段築き上げ、そこからアーチ型に張り渡して完成した。

一つが約1トンの40余の花崗岩を加工して25段に緻密にかみ合わせて築いた。

現在、その中の七つの段が半分ずつ崩れたにもかかわらず、微動だにしていない。橋の長さは8.55メートル、幅は3.1メートル、最高高さは約7.1メートルである。　鉢淵寺の虹の橋は、自然景観との調和や建築美学的な側面からみても優れている。

虹の橋

この橋を渡って少し行けば、鉢淵寺址がある。

鉢淵寺は、8世紀後半に真表律師という僧侶が初めて建てた寺である。この寺の建築に関して「米岩と真表律師」という伝説が伝わっている。

12歳に出家して僧侶になった真表律師は、仏教を一生懸命修行して当代の有名な僧侶になった。ある年、金剛山の名所を見て回りながら鉢淵沼谷に着いた彼は、景色もよく、寺の敷地としても適当だと思われるここに鉢淵寺という寺を建てた。

その後、彼は故郷に行って老父母を連れてきた。しばらく経って父は鉢淵寺で世を去った。母は女性の身柄なので寺に居るわけにはいかず、仕方なく山の向こうの渓谷で暮らすようにした。

真表律師は一人暮らしの母のために雨の日、雪の日を分かたず毎日8キロもの険しい峠を越え、自分の手でご飯をつくって母にもてなした。彼の厚い孝心に感動した人々は、孝子が母供養のため行き来した峠だとして孝養峠と呼んだという。

松林区域

松林区域は、日出峰と堡塁峰の間の深い渓谷から始まり、東南側に流れる百川川渓谷の名勝からなっている外金剛名勝区域の一つである。

松がうっそうとした森林をなしている。

金剛山4大滝の一つである十二の滝をはじめ有名な景色が多いばかりでなく、断崖の間の小川

の一面に丸くて大きい白岩が敷かれている特異な渓谷美を見せている。
　松林区域は松林洞、万相洞、城門洞地域に分けられる。
　松林洞は、百川川下流の百川橋から松林窟までの渓谷区間である。青い松が生い茂っている。
　この地域には、百川橋の北側の松林洞渓谷を流れる百川川にある長さ62メートル、幅32メートル、深さ4.5メートルの百川潭と、泡沼の両側の青い松林が清い水面に映されていつも青緑色を帯びている長さ86メートル、幅31メートル、深さ4メートルの青松潭がある。

松林渓谷

　また、2筋の伏せ滝が岩壁を伝って流れ落ちながら泡を立てる長さ32メートル、幅13メートル、深さ4メートルの泡沼もある。
　このほかにも、双滝と双滝沼、高さ1000余メートルの岩山の中腹に雨水が流れ落ちてできた溝がまるでチマのひだのようだとして名付けられたチマ岩、三つの洞窟からなる松林窟、松林寺址がある。
　松林寺は1172年に建てられた。
　松林寺址は、チマ岩を背景にした美しい松林の中にあるので、四方の景色がこのうえなく秀麗である。
　昔にはこの一帯に樹齢数百年の老松が生い茂っていたが、日本帝国主義支配当時に乱伐されて、今はその痕跡として1～2本の大きな松があるだけである。
　松林洞の百川川の上流が万相洞である。切り立つ絶壁の間の千姿万態の景観をなした渓谷である。
　四方がうっそうたる林で覆われた深い渓谷には、層岩絶壁と清い小川がある。小川に沿って合流の滝、竜沼、直の滝、桃沼、二段の滝、万相潭、万相の滝、鷹岩、虎岩などさまざまな滝と清い淵、奇岩が連なっている。
　万相潭は、畜力ひきうすの床石のように丸くて平たい窪んだ1枚の平岩に清い水がいっぱい溜まっている。
　万相潭の周りを楕円形の丸い白岩が二重三重に取り囲んでおり、その中で目立つのは、まるでこしきを伏せたような岩が淵の中にきちんと置かれていることである。その上には石こしきが揺れるのを恐れてか、同じ大きさの岩が載せられている。この石こしきに2メートルほどの直流の滝が、束ねた絹糸を垂れているように流れ落ちるのが万相の滝である。
　万相の滝はそれほど大きくない垂直の滝であるが、流れ落ちる水が石こしきから万相潭にこぼれ落ちる模様が実に奇妙である。
　狭い道を通ると、十二の滝の

音が聞こえるが、ここから渓谷の奥までを城門洞という。十二の滝は、万相洞の上の渓谷、高さ1588メートルの彩霞峰と高さ1482メートルの昭槃悳の間を流れる水が彩霞峰の南側の崖を伝って12段をなしながら流れ落ちる滝である。

高さ289メートル、長さ390メートル、幅4メートルのこの滝は、金剛山の有名な4大滝の中で一番高い滝であり、天然記念物として指定されている。

滝の下には平岩が一面に敷かれており、ここから見上げる景観は実に見物である。滝の水がまるで空から落ちるような感じで、その音また百雷ごとくとどろき渡る。

十二の滝は高いので、下からはその半分しか見えない。全景を見るには、向かい側の崖の上にある隠仙台と仏頂台に上らなければならない。ここには城門の滝、三つまたの滝などの滝とさまざまな奇岩怪石、滝の淵などがある。

十二の滝の下から西北方向へ

十二の滝

深い狭谷を200メートルほど上ると、左側の峰の上に獅子岩があり、ここから約1キロ上ると、第2金剛門にいたる。ここからもう少し上ると、大きな岩の洞窟である城門窟がある。洞窟の高さは約2.5メートル、長さと幅はそれぞれ4メートルほどであり、内部はかんなを掛けたように四角をなしている。

城門窟はうっそうたる森林の中にある天然洞窟であり、中に入ると蒸し暑い真夏にも寒い感じがする。

ここを通り過ぎて乱射の滝、金剛の滝と石門の滝を通ると、大将洞にいたる。

大将洞は城門洞渓谷の奥にある。昔、大力持ちが住んでいた所だとして付けられた名称である。この渓谷の奥には、折り重なっている白岩がまるで数百冊の大蔵経を積み上げたかのように見える大蔵岩もある。

この区域の百川橋付近には百川橋重創碑が建てられている。

碑文には、1686年の大水で押し流された橋を建て直したという内容が記されている。

碑文から以前に百川橋という橋が存在したことを知ることができる。百川橋から西南側の開溽嶺を越えて三巨里にいたる前で右側に分かれる竜川を渡る所に1755年に建てられた竜川橋碑がある。

隠仙台区域

隠仙台区域は、楡岾寺址の西側にある外金剛の名勝区域の中で最南端に位置した地域である。

隠仙台区域は竜川洞、暁雲洞、九淵洞、玉壺洞からなっている。

隠仙台区域の南側の南江の支流である竜川下流にある谷間が竜川洞である。

この谷間の松林に楡岾寺址がある。楡岾寺は金剛山に初めて建てられた有名な寺であった。竜川を前にひかえ、丸いリョンメ山の低い稜線を背にしている楡岾寺址は、四方の景色が美しく、閑静な所にある。昔、楡岾寺の周辺には樹齢数百年のニレの木が森林をなしていたという。楡岾寺という名もこれに由来したものである。楡岾寺址には、昔、数多くの鳥が群れをなして集まり、くちばしで地面をつついて発見したという「烏琢水」という泉がある。

楡岾寺は、9世紀頃に初めて建てられ、12世紀の中頃には500余間、15世紀初には3000余間をもつ大規模の寺に拡張された。

楡岾寺は、祖国解放戦争時期にアメリカ帝国主義侵略者の野蛮な爆撃によって全焼し、址だけが残っている。

楡岾寺址の前にアーチ型の二つの石橋がある。1トンをはるかに超える13の花崗岩でアーチ型の橋梁を建てたが、その高さは3メートル、左右の基礎の幅は約5メートルである。二つの橋は8メートルほど隔てている。

楡岾寺の鐘は、金剛山の多くの寺の鐘の中で形態が優雅で、規模が大きいことで有名である。この鐘は1729年に鋳造された。去る祖国解放戦争時期、人民軍の勇士たちは献身的な闘争を繰り広げてこの鐘を守り、原状通りに保存した。現在、この鐘は妙香山歴史博物館に展示されている。

楡岾寺の能仁殿に安置していた53仏は、金剛山の仏像の中でも指折りのものであった。金、または金銅製の仏像は、ほとんど4センチから15センチほどの小さいもので、全てが精巧な彫刻技法で作られた。しかし、日本帝国主義の軍事的占領の時代に略奪された。

楡岾寺址の周辺には、300年以上の歴史をもつ複数の碑がある。

楡岾寺の紀蹟碑

17世紀に建てられた奇岩堂の法峯大師碑は、金剛山の歴代の僧侶たちの中で有名な奇岩大師(1552年～1634年)の足跡を記録した碑である。

竜川洞の北側の二つの小川が合流する所から右側の谷間が暁雲洞地域である。ここには、九竜沼、双臼沼、鉢の滝、隠仙台、七宝台などの名所がある。

九竜沼は、楡岾寺址に棲んでいた9匹の竜がしばらく立ち寄ってから九竜淵へ向かったという沼である。沼の長さは19メートル、幅は15メートルであり、その周辺と水中には9個の大きな石臼のような窪みがある。

九竜沼

9個の窪みの中で4～5個は水中に沈んでいる。

仙人が降りて遊んだという隠仙台で四方を見渡すと、北西側には日出峰、月出峰、堡塁峰が、北側には彩霞峰、集仙峰、昭槃悳の奇妙で美しい姿がよく見える。

特に、彩霞峰の南側の絶壁に長く流れ落ちる十二の滝の景色は天下の絶勝である。展望台の岩は、二つの手のひらを合わせているかのようだが、半分ぐら

い開かれている。

隠仙台の西北側に七宝台がある。その形がまるで7種の宝石で装飾したような奇妙な岩峰である。

奇岩怪石で千姿万態をなした七宝台に立つと、日出峰をはじめ柏田一帯の数多くの峰と遮日峰、弥勒連峰など雄大な峰が一目に見渡される。

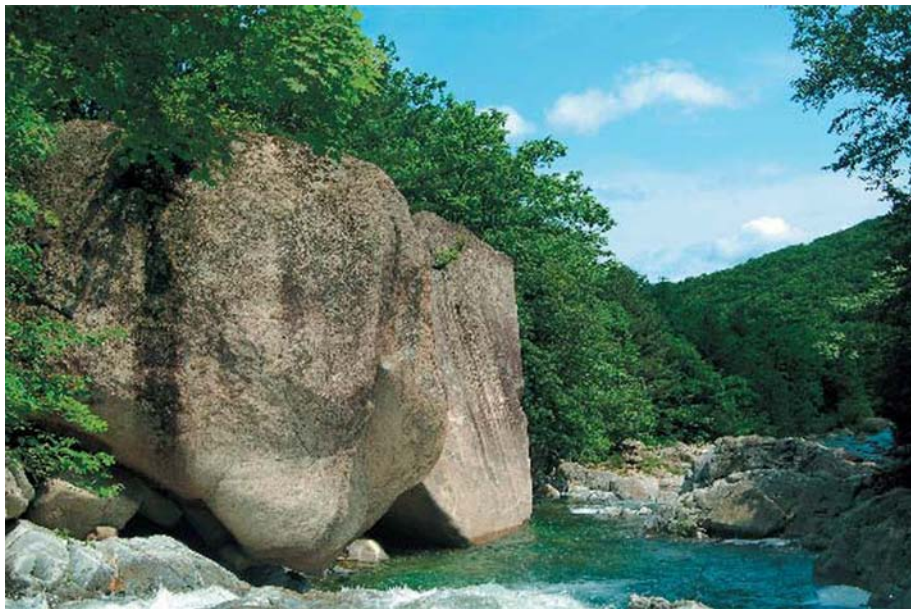
竜川の合流点から左側に分かれて入る地域が九淵洞である。

この地域には、船のような形の船潭、白緋緞の滝、二筋の滝、九蓮の滝、九淵季節の滝、弧の滝、香盧峰などの名所がある。

また、あたかも雪が舞い散るように見える高さ10メートルの飛雪の滝もある。

飛雪の滝からもう少し上がると、伏せ滝と清い淵からなっている美しい渓谷があるが、ここが玉壷洞渓谷である。

壺の中のように深い谷間にある玉のように美しい滝だとして、玉壺の滝と呼ばれるこの滝は、高さ15メートル、長さ30メートルの伏せ滝である。

半夜台

玉壷の滝から1キロの区間は、前後の渓谷が屈曲しているので、金剛山の景色の中で特色のある所である。ここには、金剛山の庵の中で最も高い所にある重内院の址と太乙岩がある。

太乙岩を通ると、竜岩と呼ばれる長さ50余メートルの岩がある。伝えられる話によると、この竜岩は暁雲洞の九竜沼を経て九竜淵に向かっていた9匹の竜の中で1匹が太乙岩の下に隠れ、石となって固まったものだという。

千仏洞区域

千仏洞区域は、千仏山と紋珠峰周辺の名勝を包括する区域である。

千個の仏像型の岩があるという千仏山とその谷間を中心とする区域なので、千仏山、または千仏洞と呼ばれる。

千仏洞区域は仙岩洞、千瀑洞、千仏洞からなっている。

千仏山は、高さ465メートルの岩山である。金剛山の峰の中で海岸から最も近い所に位置している。

千仏山の峰の下の半分は樹木の生い茂った深い渓谷からなっており、その上は奇妙な岩からなっている。それで遠くから眺めると、杵、またはきぬた棒のような石柱が数多くそびえているかのように見える。千仏山から始まる小川は、岩の割れ目から湧く清い水が石の床に流れ落ちるので、その味が特別によく、また青々と見える淵と壮快な滝があって、景色がきわめて美しい。

仙岩洞には二筋の滝、二段の滝、虎岩、狼岩、仙人窟、六仙岩、六仙潭などの名所がある。

二筋の滝は、斜めの扁平な岩の上に二またの水が滑り落ちる伏せ滝である。長さは上のものが15メートル、下のものが6メートルであり、滝の一番下には深さ3メートルの三角池がある。

千瀑洞は六仙岩から小さい二段の滝までの渓谷を包括しているが、滝がたくさんある。

長さ15メートル以上の伏せ滝である散珠の滝は、清い水が崖にぶつかって珠が四方に散り、

外金剛

また集まって静かに流れ落ちるようである。散珠の滝は伏せ滝にしては、あまりにもおとなしくて静かである。

散珠の滝の上に立つと、人間の姿そっくりの石塔、石仏、獣や鳥などいろいろな形の奇岩怪石を見ることができる。

散珠の滝の上にある長さ20メートルの連珠の滝は、斜めの岩肌を伝って滑り落ちる水が二度止まってから落ちるが、まるで珠をつないだようである。

また、高さがそれぞれ15メートル、約40メートルの三段の滝、谷間に鳴り響く水音がまるでシンフォニーを演奏するかのような交響の滝、季節によっていろいろな色の絹布のように変わる緋緞の滝、仙人が並んでいるかのような群仙岩がある。群仙岩から数百メートル上がると、道の両側に狭い間隔をおいて立っている天然石門があるが、これが東海門である。

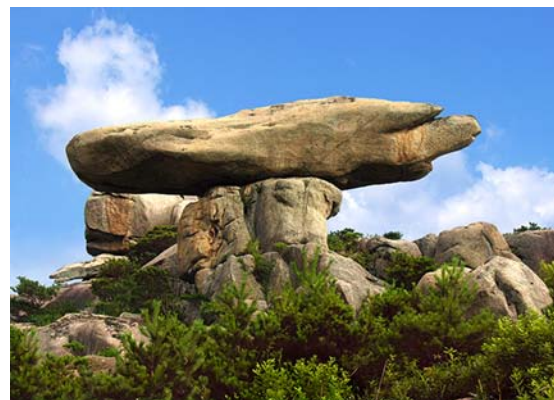
千仏洞には、岩肌に白糸を垂らしたように白い水煙を上げながら流れ落ちる白糸の滝がある。高さは50メートル、幅は10余メートルである。

滝の下に白糸潭があり、周辺には蛙と亀模様の岩をはじめ奇岩怪石が多い。

千仏洞の奥にいたると、高さ30メートルほどの千仏の滝がある。

二筋の滝

交響の滝

別金剛

千仏洞の奇岩

別金剛の奇岩

仙蒼区域

仙蒼区域は、朝鮮東海へ流れる仙蒼川と周辺の峰の名所を包括する。

東西52メートル、南北26メートル、水深1メートル以上の長円形の金剛池は、岩壁に囲まれている。

ここには、遠い昔、金剛山の水晶峰の頂上で昼にも夜にも明るくて美しい光を放つ珍しい水晶を取り戻したという

伝説がこもっている。
　仙蒼川の渓谷は、扁平な岩と千姿万態の美しい滝、淵が多くて特異な渓谷美を表している。
　仙蒼川の渓谷は、小川の底が全て磐石となっている磐石洞と丸々とした大きな岩が谷間に敷かれている円石洞からなっている。
　磐石洞は、高城邑の北側の主険橋から水門沼までの区間である。
　ここには、筆岩と百相岩、群像岩、オットセイ沼、竜沼、舞台岩、双柱沼、鳩岩、島沼、白清潭などの名所がある。
　磐石洞の上方の水門沼の上から仙蒼の滝までが円石洞である。
　ここには、熊岩、水門沼、銀糸の滝、仙蒼の滝、噴珠の滝、金珠の滝などの名所がある。

百井峰区域

　百井峰区域は、雲田里の西南方向にある百井峰と鉢峰を包括する区域である。
　百井峰は、雲田里所在地から西南方の約3キロの所にある石山(748メートル)である。
　百個の釜、または百個の井戸がある峰だという意味で名付けられた。ここには、百井峰と隣接した小さな漁村で、若い漁夫が村人のために海に魚を捕ろうと行って、竜王の娘である水嬢王女に会ったという伝説が伝わっている。

伝説「漁夫チョンガーと水嬢王女」

　昔から小金剛と呼ばれる外金剛の百井峰区域は、陸地より海の方から眺める景色がもっと美しい。
　天を頂いて高くそびえた主峰である百井峰をはじめ禽獣峰、仙蒼山、蓬田山などが東南方の海岸に向かって連なり、槍の先のようにとがったり、鉢のように丸い形の千姿万態をなしている。
　ここの絶勝の中でも特異なのは、叢石亭から船に乗って海へ1時間ほど行けば、下百峰と上百峰の間に小さな峰がひそかに姿を表していることである。

　あたかも人間の指先のように奇妙な形のその峰は、山ひだの狭い所にあるので、船が少しでも前進したり後進したりすれば、横に連なった低い山に隠れて見えない。
　誰かを手招きする女の手のようなその峰を、地元の漁夫たちは「アル峰」と呼ぶ。そして「アル峰」が姿を現す水域を「アル峰の海」と呼んでいるが、ここには昔から伝わる伝説がある。
　百井峰と隣接した小さな漁村にチョンセと呼ばれる若い漁夫が住んでいた。幼くして父母を失った彼は、20歳を過ぎたときまで結婚ができず、魚を捕ったり、薬草を採取したりしながら村人と睦まじく暮らしていた。
　ある日、隣村の一老人が訪ねてきて、妻が病床にあるが、ホッケだけを食べたいと言っている、それで旬でもないときに訪ねてきた、どうか助けてくれ、と頼んだ。
　春や秋に捕れるホッケを夏に捕るというのは、厳冬にイチゴを求めるも同然だったが、目に涙をたたえて話す老人の懇請が自分のことのように思われて、笑顔で数日間だけ待ってくださいと言い、老人を帰らせた。
　その足で遠海へ出た彼は、一日中苦労して、2匹のホッケを捕った。
　老人は不死の薬でも受け取ったように喜びながらホッケを持って帰ったが、チョンセはあまりにも少ないような気がして、ホッケをもっと捕ろうと再び海へ出た。
　しかし、荒波に遭い、帆柱と舵が壊れ、船が転覆して海の中に沈んだ。
　やがて目を開けたチョンセは、自分が海中の怪物につかまって水晶宮殿に連れられていることに気付いた。
　竜王の娘の水嬢王女の前に立たされた彼は、竜宮の法に違反したから罰すると語る水嬢王女に自分には罪がないと堂々と言った。彼の剛毅な姿に魅せられた王女は、彼に一夜ご馳走して帰らせるように

した。帰る途中、サメと遭遇して勇敢に戦うチョンセを救って共に金剛山の海岸にまで来た王女は、彼にホッケと竜宮の万能薬を与えながら老人に渡すようにした。

そして、金剛山の見物をさせてほしい、準備は十分にしてきた、と言った。

チョンセは、王女と共に下百峰の入り口を抜けて松林の坂道に沿って山を上り始めた。

しばらく上ると、東側にかなり高い岩壁を背にした小さな百井池が現れた。王女は清い水面で泳ぐスズガエルを見て、手を叩きながらこの前に亀と共にここまで来たことがあると言った。

そのときは亀の歩みがのろいので、ここまでしか見物できなかったが、今回はもう少し深く入ってみようと言った。

奇妙な岩が連なっている下百峰の中腹を通って傾斜した平たい岩の上に登ると、清い水をたたえた小さな池が次々と現れた。それはあたかも釜や飼葉桶、石臼のような形をしていたが、人がわざと掘ったようであった。

王女はこれらの池を見て回りながら、ひっきりなしに嘆声をあげた。

チョンセは景色に見惚れている王女に、ここ以外にも小さな池がたくさんある、この付近に釜や井戸のような形の池が百もある、それでこの山を百井峰と名付けた、と言った。

下百峰を見て回った二人は上百峰にいたった。

険しい山道を歩いたため疲れきった王女は、3面が岩壁に囲まれた「屏風岩」を通って急傾斜の尾根に登った。見下ろすだけでもめまいがする断崖の中腹に細道があったが、彼女はその道に足を入れるのが怖かった。

なんとしても山頂に上がる決心を固めた彼女は、チョンセに自分を抱いて渡してほしいと言った。

顔が赤くなったチョンセは、自分に近寄る王女を抱き、断崖の道を通って、ついに百井峰に上った。

東側には、一望千里の青い海と島、白帯を巻いたような砂場が屏風の絵のように見え、南側には、仙蒼山、蓬田山、勢至峰の山並みが濃い緑色の山容を誇りながら立ち並んでいるのが、あたかも波打つようでもある。また、うっそうとした森の禽獣峰はこの上なく雄々しく見えた。

百井峰から降りてきたチョンセと王女は奥まった谷間に入った。王女はここで休みながら水遊びをしたいと言った。

チョンセは、王女が水遊びをする間、近くの山で網の引き綱に使うシナノキの皮をはいだ。

彼が帰ってみると、水浴びして清楚な花のような王女は、金剛山は竜宮よりはるかに美しい、ここで四季を通じて金剛山を見物し、網を編み、魚も捕りながらあなたと一生を共にしたいと言うのであった。

その後、彼らは日当たりのよい所に自分たちの家を建てた。そこで蜜月の数日を過ごしたチョンセは、ある日の早朝、海へ向かう支度をした。

チョンセを見送るため家を出た王女は、山の向こうの海を指しながら「海へ行けばこちらをしばしば眺めてください。あなたに向かって手を振る私の指先が指す所には魚が多いはずです。また、私がここにいる限り、そこには決して風浪が起こらないでしょう」と言った。

水嬢王女を妻として迎えたチョンセはその後、海で熱心

に魚を捕ったが、百井峰の山ひだの間に水嬢の指先が指す海には魚が多く、水平線に激しい風浪が起こる日にもそこは静かであった。

チョンセは、いつも水嬢に見守られていることに力を得て、魚をたくさん捕った。

チョンセと水嬢は、漁村の人々から睦まじくて勤勉な夫婦だと称えられながら子宝に恵まれて、共白髪まで幸せに長生きした。

チョンセに向かって手を振る水嬢が石となったという小さな峰は、今「アル峰」と呼ばれている。

「アル峰」とは、魚が多く、海がないでいることを知らせる峰であるという意味である。

今日も、この地方の漁夫は「漁夫チョンガーと水嬢王女」の伝説と共に「アル峰」という言葉をよく口にしている。

内金剛

内金剛は金剛山の西部地域を包括している。

金剛山の主峰である毘盧峰とその北側の玉女峰、上登峰、温井嶺、五峰、禽獣峰、南側の月出峰、日出峰、遮日峰、白馬峰、好竜峰など中央連峰を境にして東側の外金剛と接している。

内金剛の自然風景において基本となるのは、比較的広く、穏やかな渓谷の風景である。山容は外金剛に比べて相対的にとても穏やかである。

内金剛には人々の興味をそそる珍しい形の天然の石門、石溝、石塔も多くあるので、金剛山の渓谷美の極致をなしている。

昔から人々は、外金剛と対照される内金剛の穏やかで奥ゆかしい風景を女性的な趣だと評した。

毘盧峰区域

毘盧峰区域は毘盧峰と永郎峰、堡塁峰、月出峰と日出峰など金剛山の主峰を包括する地域である。

毘盧峰は金剛山一帯で最も高い峰である。春にはよろずの花が満開する山、夏には見るにもすがすがしくてさわやかな緑したたる谷間、秋には峰と谷間を赤く染める紅葉、冬には真っ白い雪に覆われる美しい景色は、金剛山の景色の中で最高だと言える。

永郎峰へ上る谷間の地域を永郎洞と呼ぶ。

ここには、かわいい子を懐に抱いた母を彷彿させる愛の岩がある。昔、金剛山に住んでいた仲良い夫婦が子宝に恵まれなくて20年間、この峠を上り下りしながら金剛山の山神にお祈りしてやっと子どもを授かったという伝説がある。

愛の岩を通ると、銀のはしご、金のはしごがあるが、のこぎりの目のような岩肌がまるで空に寄せかけたはしごを見るような感じを与える。ここに朝日が差し込むときには玲瓏たる銀色を出し、夕日が照り輝くときには燦然たる黄金色を出す。このため、この岩に銀のはしご、金のはしごという呼び名が付けられた。

銀のはしご、金のはしご

毘盧峰と永郎峰が連なった尾根にある広くて扁平な地帯が毘盧高台である。ここの木々は一様に地面に這っている。エゾムラサキツツジ、キバナシャクナゲ、クロフネツツジなどの低木と各種の亜寒帯性高山植物が混生している。

毘盧高台の東側にある金剛郡と高城郡の境にそびえた毘盧峰は金剛山の主峰であり、最も高い展望台である。高さは1639メートルである。

毘盧峰の展望景色で特異なのは、朝鮮東海の日の出と、夕焼けによって赤く染まる山の姿を眺めることである。

毘盧峰頂の丸い岩々の中には船のように見える大きな岩がある。この岩は、毘盧峰の一番高い所にあり、その形が船に似ているとして船の岩と呼ばれる。

毘盧峰の西側の近くに向かい合っている峰が永郎峰(1601メートル)である。

昔、ここで永郎仙人が心身を鍛練したという。

永郎峰へ登る道には数百種の多種多様な植物が調和して育っており、尾根に上がれば左側に背丈の4～5倍になる大きな岩が一つある。向かい合うとその形が人間のように見えるが、少し通り過ぎて振り返ってみれば子どもを左の肩に乗せているかのように見える。赤ん坊岩ともいわれる。

永郎洞にはまた、しっかりと築城した城の上で将軍が頭を上げて戦場を見回すような堡塁峰、眺望がよいことで名のある月出峰と日出峰がある。

日出峰と遮日峰の間の内金剛と外金剛を行き来する峠を内分水嶺と呼ぶ。

万川区域

万川区域は、内剛里村から内金剛の金剛門にいたる区域である。内金剛の入り口にあたる。1万の小川、すなわち多数の小川が集まって流れる万川をひかえている区域である。

万川区域は内剛洞、金蔵洞、長安洞、表訓洞に分けられる。

内剛洞は内金剛の入り口に位置しているこぢんまりした村で、内金剛を探勝する拠点となる。内剛洞の近くには長淵寺の址があるが、ここには長淵寺の土台石と3層塔が残っている。

金蔵庵谷間の左側の山腹にある金蔵庵の址には、四つの石獅子で塔身を支えた石塔(金蔵庵の獅子塔とも呼ばれる)がある。この塔は、朝鮮の古い塔の中で特色のある塔の一つである。

金蔵庵の獅子塔

金蔵庵址から1キロほど上がると、屏風のように取り囲んでいる絶壁に流れ落ちる緋緞の滝がある。高さは65メートル、長さは103メートル、幅は3メートルの大きな滝である。中間には細長い淵がある。緋緞の滝の上方に、絶壁に深くうがたれた溝を伝って流れ落ちる2段滝である花瓶台の滝がある。春季には花煎（ツツジの花を米粉と共にこね、油で炒めた料理）を食べながら遊ぶ所、夏には避暑地、秋には紅葉を見ながら楽しむ所として有名である。

長安寺が位置していた谷間を長安洞と呼ぶ。内剛里から長安寺址を通って三仏岩にいたる約4キロの区間を包括する。清らかな水の流れる万川をはさんで屏風のように取り囲まれた峰と、うっそうとしたチョウセンゴヨウの林によって、まるで深くて深い森の中に入っていくような感じを受ける。

長安洞の入り口の万川橋の向こうに位置していた長安寺は、金剛山4大寺の一つであり、6世紀に初めて造営されて数回にわたって改築、増築されたが、去る祖国解放戦争時期にアメリカ帝国主義の野蛮な爆撃によって破壊された。

鳴淵

三兄弟の岩

万川区域にはこのほかにも、水の音が人間の泣く音に似ているという鳴淵、三兄弟の岩、仙人を迎える橋だといって迎仙橋と呼ばれる三仏岩橋、素晴らしい展望で有名な放光台、改心台、天逸台などがある。

「放光台」の伝説

高麗太祖の王建が内金剛に入る途中、ある峠にいたって金剛山の法器菩薩が自分の真の姿を見せなければ山に入らないと言った。すると、向かい側の山頂でまぶしい光がきらめき、光が四方に放たれたという。それを見た王建は、法器菩薩のお出でだと思い、急にひざまずいて大礼をした。それ以来、光が放たれた山頂を放光台、王建が大礼をした峠を拝再嶺と呼んだという。

三仏岩

万川区域にはまた、三つの仏像が刻み込まれた三仏岩がある。この岩は高麗(918年～1392年)時代、僧侶の羅翁が発起して刻んだものだという。

三仏岩の正面には弥勒、釈迦、阿弥陀の立像があり、左側には二つの小さい仏の彫刻、裏面には60の羅漢像が刻まれている。

三仏岩を通って内金剛、金剛門までの万川谷間とその周辺の景色のよい地域が表訓洞である。

表訓洞は、比較的広い谷間に

表訓寺

松、チョウセンゴヨウが生い茂っており、奇岩怪石を頭に載せた峰に囲まれている真ん中には水晶のような水が丸い岩を洗いながら流れるので景色が絶妙である。

表訓寺は万瀑洞の入り口に位置している。670年に建立されたが、数回の補修を経て1778年に改築したのが今日まで残っている。

三仏岩を通ると、道の右側に白貨庵址がある。

ここには、西山大師と四溟堂など愛国的な僧侶の画像を保存してきた建物である酬忠影閣があった。

現在、白貨庵址の裏手には西山大師碑をはじめ、ほとんど17世紀の前半に建立された四つの碑石と五つの卒塔婆がある。

西山大師碑は一名、清虚堂休静大師碑とも呼ばれる。

西山大師碑は、壬辰祖国戦争時期の西山大師の功績を記念して1632年に建立された。

表訓寺の北側に正陽寺がある。

高い所に位置していて内金剛の全ての峰を一目に俯瞰することができる。金剛山でも一番日当たりのよい所に位置しているので正陽寺と呼ばれる。600年に建立された後、数回の補修を経て今日まで伝えられている。

万瀑区域

万瀑区域は、内金剛の金剛門(願花門)から花竜潭までを包括する地域である。滝が多いので万瀑洞と名付けられた。

表訓寺から万川の方に金剛門がある。昔から花を探して入っていく門だとして願花門とも呼ばれている。

表訓寺の裏手にある金剛門を通ると、玉のように清らかな水が流れる渓谷と淵、奇妙な岩と絶壁、峰が広がっており、これはまるで金剛門の中に隠しておいたよろずの景色をにわかに広げているような感じを与える。

ここには、金剛門と金剛台、黒竜潭、琵琶潭、噴雪潭、観音の滝、真珠の滝、獅子岩などの名所がある。

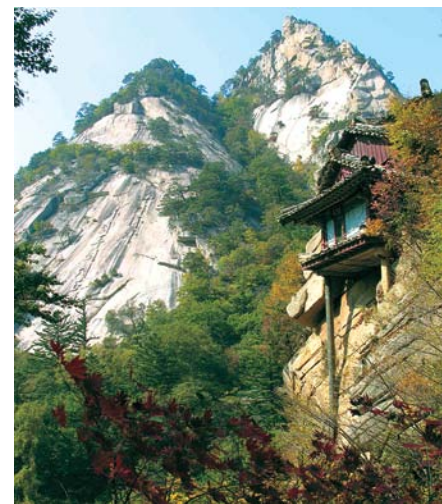
観音の滝の上には小川が流れているが、そこの扁平な岩に丸い窪みがある。洗頭盆と呼ばれるこの窪みの深さは74センチ、直径は48センチである。

万瀑洞の法器峰の下には、八つの淵が並んでいる。

内金剛にある八潭といって「内八潭」とも呼ばれている。

万瀑区域で特異なのは、高句麗時代に建立したと伝えられる宝徳庵である。この寺は、内金剛万瀑区域の内金剛八潭の一つである噴雪潭の東南側の崖にぶらさがったような奇妙な形をしている。

高さ20メートルを超える絶壁の中間部に長さ7.3メートルの銅柱一つに支えられて建てられた平屋建ての一間の建物である。

宝徳庵は、その後ろ側の絶壁

宝徳庵

にある幅1.6メートル、高さ2メートル、奥行き5.3メートルの自然洞窟である宝徳窟とつながっている。宝徳庵は627年に建立されたと伝えられるが、今の建物は1675年に建て直し、1808年に補修したものである。

切り立った絶壁の外に突出した宝徳庵は、風が吹けば飛んでいきそうであり、そこに上がれば今にも崩れ落ちそうに見えるが、長い歳月が流れた今もその姿に変わりはない。

万瀑区域には、朝鮮東海の竜宮で棲んでいた亀が金剛山を訪れて1万種の薬草を洗いながら流れ落ちる内金剛万瀑洞の水を飲み、天下の絶景を思う存分見物して帰ろうとしたが、その間身体が肥大化して入ってきた穴を抜け出せず、岩に変わったという伝説がある。

白雲台区域

白雲台区域は、火竜岩を通って四仙橋まで(万瀑洞渓谷の上流)の区間とその北側の白雲台と灵鷲峰にいたる区間の峰と渓谷を包括する区域である。この区域は白雲洞、雪玉洞、水流花開洞に分けられる。

摩河衍から万花庵を通って白雲台にいたる地域が白雲洞である。白雲洞から少し上がれば、玉石を削って立てたような奇妙な峰がある。この谷間の奥に金剛山にだけ見られるハナブサソウがある。

万瀑洞の八潭の最後の淵である火竜潭の上方に摩河衍(「大僧」という意味)と呼ばれる寺の址がある。もとより摩河衍は、四方8尺の部屋が53間もある大きな寺であった。661年の建立後、数回にわたって増築・改築されてきたが、去る祖国解放戦争前まで存在した建物は1831年に改築したものであった。過去、摩河衍は金剛山の真ん中にあったので、内金剛、外金剛を遊覧する探勝客の宿泊所となっていた。摩河衍の址から左側に分かれた小川に沿って上がれば、摩河衍の付属建物である七星閣があり、600メートル上がれば、展望によい蓮花台が昔の姿のまま保存されている。

去る祖国解放戦争時期、アメリカ帝国主義の爆撃によって寺の址だけが残ったが、1964年に48平方メートルの亭が建設された。展望がよく、探勝路が交差した所なので憩いの場となっている。高さ846メートルの平坦な地帯に位置している摩河衍址は、妙吉祥を通って毘盧峰と外金剛へ行く道にあるので、金剛山探勝の中心地ともなっている。

金剛薬水で有名な白雲台から東北方を眺めれば、銀の柱を立てたのか、それとも水晶の柱に樹氷が咲いたのか、数多くの白い石柱が背伸びするように空高くそびえている峰があるが、それが衆香城である。

万花庵址の左側の灵鷲峰に上がれば雪玉洞である。迦葉窟のある谷間だとして迦葉洞ともいう。林が生い茂り、雪玉潭、黄玉潭、内万物相、灵鷲峰などの名所がある。

仏地谷の小川から四仙橋までを包括する谷間を指して、花開洞、または水流花開洞と呼んでいる。仏地谷に仏地庵という寺があるが、その名前は、ここで地を掘る過程に仏が出たことから由来した。

仏地庵の前には味のよい甘露水という泉がある。

伝説「甘露水(金剛薬水)を発見した白雲鶴」

この甘露水は、遠い昔、金剛村に住んでいた白雲鶴という人によって発見されたという。

幼年期から胃病に悩んでいた彼は食事がままならず、そのために体が弱りきって耐えがたい苦痛をなめていた。

ある日、彼は胃袋の痛みが少々消えると、昼寝をした。

夢にある老人に会ったが、自分を金剛仙人だと紹介したその老人は、金剛山の高い崖の下にある薬水を飲むなら持病は言うまでもなく、万病が治るというのであった。

覚めてみると夢であった。妙な夢でもあったが、以前から金剛山谷間の奥によい薬水があるといううわさを耳にしていた白雲鶴は、薬水を探すために万瀑洞に向かって出発した。金剛山の1万2千の峰を全部見て回ったが、探すことができず、がっかりして杖に頼って万瀑洞に戻ってくるときであった。彼は片側の翼に怪我をした1羽の白鶴が辛うじて白雲台に向かって飛んでいくのを見た。

しばらく後、翼を大きく広げ

た白鶴は、白雲台をひとまわりし、青空に向かって力強く飛んでいった。

「あれは本当に珍しいことだな」

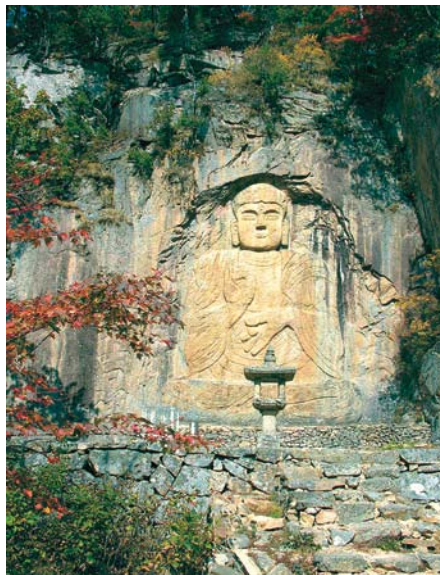
白雲鶴はいくら考えても神秘なことなので、きびすを返して白雲台に向かった。

彼が白雲台の下にたどり着くと、不思議なことにそこでは青い水がちょろちょろ流れていた。

彼は、両手で清い泉水をすくって飲んだ。このように、その水を3回飲んだら、これまで胸をほじくるような痛みがなくなり、元気が回復されて軽い足取りで家に帰ったという。

そのときから、この薬水は「金剛薬水」と呼ばれるようになった。

以後、金剛薬水は全国に知られるようになり、全国各地の人々が毎日止むことなく病気の治療のためにここを訪れたという。

花蓋潭を通って少し行くと、妙吉祥庵の址がある。その後ろの岩に高さ15メートル、幅9.4メートルの大きな仏の坐像が刻まれている。これが朝鮮で最も大きい高麗時代の磨崖仏(岩に刻んだ仏)である妙吉祥である。周辺のあちこちにハナブサソウの花が咲く。この花は天然記念物として保護・管理されている。

妙吉祥

明鏡台区域

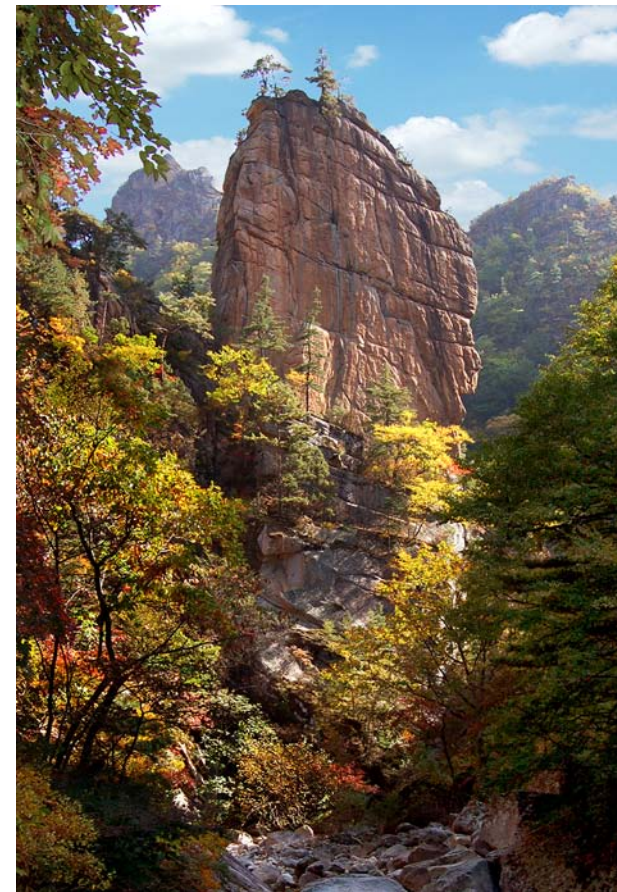
明鏡台区域は、万川橋を通って右側に分かれた百川洞谷間とそれに連なった灵元洞、白塔洞谷間、白馬峰、遮日峰を包括する。大きな岩の景色で有名である。明鏡台区域は百川洞、灵元洞、水簾洞と白塔洞からなっている。

百川洞は釈迦峰と十王峰の間にある谷間であり、ここには百川の滝と百川潭、アヒル岩、玉鏡台と玉鏡潭などの名所がある。

この区域で特異なのは明鏡台である。高さ90メートル、幅30メートルのこの岩は、玉鏡潭の側面に大きな鏡を山にもたせかけて立てたような形の岩である。扁平でやや長めの長方形の岩であるが、岩の面はきれいに磨いたように直線的であり、淡黄色の光を帯びている。夕日に映えて銀色、金色できらびやかに輝く。

明鏡台

伝説によると、神秘な鏡である明鏡台には、人々の心の中まで映し出されるという。

この区域にはまた、黒蛇窟、黄蛇窟などの天然洞窟がある。

金剛山の谷間の中で最も奥深くて静かな美しい谷間の一つである灵元洞に入れば、七つの奇怪な石が北斗七星のようにずらりと並んでいるので七星台と呼ばれる岩をはじめ、牛頭馬面峰、灵元庵址と玉笛台がある。

玉笛台は、灵元庵址近くの五つの岩がたがいちがいに置かれ

ている台である。昔、月夜には霊元祖師がここに上がって玉製のチョテ(横笛)を吹いたが、そのつどランバ鳥と鶴が飛んできて舞を舞ったと伝えられている。灵元一帯が一目に見渡せる展望台である。

玉笛台の前に机岩があり、その向かいに展望台である迎月台がある。

灵元庵址の傍らに米粒がぼたぼた落ちたという米出岩がある。

昔、灵元という名前の僧侶がこの深い山奥に入って初めて庵を建て、仏道修行をしたが、山容の険しい山奥なので訪れる人がいなかった。地蔵菩薩が送る米が小さい岩穴から一粒ずつ落ちたが、僧侶はその米を食って暮らしたという。食の心配がなくなった彼は、最初の決心通り修行に励んで仏教の教理に精通し、ついに一教派の有名な僧侶になったという。彼の死後、欲張りがより多くの米が出るように穴を大きくほじくったが、それ以来、米は出てこなかったという。

水簾洞は、清水が広々とした岩面をなめながら流れ落ち、美しい小川の景色を繰り広げているのが特徴である。ここには蓮花潭、半夜台、水簾の滝などの名所がある。

広い岩肌を流れ落ちる伏せ滝である水簾の滝の長さは32.5メートルである。滝の上には直径50センチ、深さ1メートル以上の石臼のような水溜まりがある。

明鏡台区域にはまた、数多くの天然石塔があり、特異な渓谷美を誇る白塔洞もある。

白玉を束ねて立てたような岩が塔のように林立している白塔洞には、高さ20メートル以上の

多宝塔

岩が両側に大門の柱のように立っている門塔、高さ30メートル以上の岩の塔である証明塔、直径20余メートル、高さ50余メートルの天然の石塔である多宝塔がある。これらの岩は、高さ30メートルの2段滝である証明の滝と十王の滝、高さ70メートルの降仙の滝によって谷間の景色をより美しくする。

望軍台区域

望軍台区域は、内金剛が一望の下に見渡せる展望台である望軍台のある地域である。松羅洞と望軍台からなっている。

松羅庵という寺があったことから、松羅洞と呼ばれる。

小川にまで広葉樹が密生してなかなか空が見えず、小川に流れる水量も少ないので閑静なのが特徴である。

ここには、素晴らしい滝と、雨季にのみ見られる季節の滝が多い。また松羅台と松羅庵址、金剛城がある。松羅台では、毘盧峰をはじめ内金剛、外金剛を分ける峰と谷が一目に見渡される。

松羅台の北側に金剛城がある。望軍台区域にあるとして、望軍城ともいわれる。

この区域には松羅台と椅子台、鳳凰台、鷹岩といった奇妙な岩と、目がくらくらするほどの断崖の道があって、純粋な自然を俯瞰することができる。

松羅台の北側に白岩の望軍台がある。金剛山で毘盧峰に次ぐ展望台である。望高台ともいう。

望軍台で展望の壮観をなすのは、望軍台の向こうにある穴望峰の頂の大きな穴を通じて青い空を見ることである。伝説によると、その穴は昔に竜が抜け出た跡だともいい、雷神(雷をつかさどる神)がわざと開けた穴だともいう。

この区域にはまた、935年頃に築いた石城である望軍城もある。この城は、約260メートルの区間に半月形で築かれている。

城壁の高さは3メートル、幅は2メートルほどである。

城は、内金剛里に入ってくる敵を防ぐ目的で築城した。城の上にはいまなお、這い上がる敵に石を落とすために集めた石の山が残っている。

太上区域

太上区域は、万川の支流である太上川が流れる谷間と、万瀑洞の金剛台の前で左へ分かれた円通谷とそこに連なった須彌谷を包括する地域である。

静かな滝と淵、かなり大きな岩などが、この区域の景色の特徴である。

円通谷は、小川に沿って上がりながら段々に滝と淵が連なっている。静かな水の流れと奥ゆかしい渓谷美でその特色を表している。

この地域では、深い岩の窪みに清水がみなぎっている清好淵と滝の下にあるひさご形のひさご沼、竜が座っていたという竜像潭と、竜が尾を振りながら抜け出たという竜谷潭、その上にくねくねと曲がった溝を伝って3段をなして流れ落ちる三段の滝、8尺の扁平な岩から美しく流れ落ちる伏せ滝である水晶簾がある。水晶簾の水は、水晶で造った簾を掛けたようなので、特色のある景色を表している。

また、水晶簾を通って少し行くと、右側に竜椎台、その左側に鶴が棲息したという鶴所台がある。これらは景色の観望に適した展望台である。

須彌庵という庵が位置していた須彌洞には、奇妙で美しい淵と奇岩怪石、天然石塔などがある。

美しい須彌七谷潭は、円通洞の口侑淵まで合わせて須彌八潭とも呼ばれている。

展望台の一つである降仙台とつながっている北側に地蔵峰が高くそびえており、その中腹には80余尺の人間の形をした大きな岩があるが、これが将軍岩である。

その下に船庵址があり、その西側に熊岩、リス岩、道士と僧侶とが言葉を交わす形の問答石がある。

問答石の下にある青玉泉には、金剛山を守って闘った青石という豪傑の伝説がこもっている。

須彌洞谷間には天然石塔の一つである須彌塔がある。下の部分がふくれており、上へ上がりながら狭くなった。上部には帽子をかぶったように大きな石が置かれ、その上には精巧に加工したような数段の板石がある。

最上部には獣の角を彷彿させるのが両側に二つ付いている。須彌庵をはじめ須彌谷間の石塔は角ばっておらず、ほとんど丸々としているのが特徴である。これらの石塔の高さは約50～60メートルである。

須彌洞谷間の奥に無数に散らばっている天然石塔が、まるで塔の群れを玉のようにつないで並べたようだとして、昔からここを群玉洞と呼んできた。

群玉洞には、須彌塔のほかにも、軟らかくて丸々とした線をなしている比較的大きい三つの天然石塔がある。その大きさと形はそれぞれ異なるが、全て周囲の森林とマッチして特異な景観を表している。

九成区域

九成区域は、金剛郡丹楓里から東南側に分かれた九成洞谷間と真夫谷(金夫谷)にある名所を包括している。

九成区域は、下九成洞、上九成洞、真夫谷からなっている。

下九成洞は、九成洞谷間の入り口から玉永の滝までの区間である。

新豊里所在地の東側の村にヨモギ畑があるが、伝説によれば、昔に、金冬至という人がこの村に住んでいたという。ある日、彼は神仙台で3人の神仙に会って遊び、ぐっすり一眠りしてから覚めて家に帰って見ると、いつの間にか50年という歳月が流れて妻子もなく、家もなく、家の跡地にはヨモギだけが生い茂っていたという。

下九成洞には、深さ4メートルの九日潭と、高さ約16メートルの九日の滝がある。九日潭から左側の九成洞谷間に入って絶壁の道に沿ってしばらく行けば錦繍の滝があるが、高さは12メートル、幅は3メートルである。その下の淵は、深さが九竜淵(13メートル)の3倍になるという。

このほかにも、九成連珠の滝、銀糸の滝、九岐の滝と九岐淵など美しい名所が多い。

下九成洞の一番上に玉女峰と

玉永の滝

永郎峰の水が合流してできた玉永の滝がある。金剛山の有名な4大滝の一つである玉永の滝は、高さ31メートル、幅3メートルである。玉永の滝の左側のラクシン峰と上登峰の間を流れる水の集まる所にある落上の滝は、夕陽のときに景色が美しいとして夕照の滝ともいわれた。

九成洞の上の谷間である上九成洞は、峰ごとに奇岩怪石が多く、大小の滝と淵が連なっている。永郎峰と竜虚峰の中間に仙人が大豆栽培をしたという高原がある。

「月明首座の豆田嶝」

遠い昔、淮陽郡に蓬田という小さな村があった。この村落には勤勉で、心のやさしい老人が暮らしていた。

ある日、柴刈りのため九成洞谷間に入った老人は、ある小川で白い服装に青い草笠をかぶった童子に会った。童子の挙動があやしいと思って、その後を追った老人は、深い山奥でこぢんまりとした一軒の草屋を発見した。これは本当にいぶかしいことだと思い、草屋に近づいていたが、急に扉が開き、美しい娘が出てきた。その娘は、自分がこの九成洞谷間に住んでいる月明首座だとし、老人を喜んで迎えた。その後ろから二人の娘が出てきて、老人を部屋に案内した。部屋の真ん中には大きな食膳が置かれていて、山海の珍味が食膳をにぎわせた。娘たちの暖かい歓待に感動し、勧められる酒を遠慮なく飲んでいた老人はふと、家のことが心配になって柴を刈って帰ろうとした。すると、娘たちはちょっと待ってくださいと言い、数粒の大豆を持って外へ出ていった。老人が外を眺めると、草屋の後ろにある台地で娘たちが大豆を植えていた。ところが、大豆は植えるや否や芽が生え、青い葉が茂り、すずなりの実が黄色く実った。見れば見るほど珍しいことであった。老人の頭には、九成洞谷間で仙人が暮らしているという話が浮かんだ。

「あ、まさにあの娘たちが仙人だな」老人は深く感嘆し、仙人たちの挙動を注視した。実った豆をもって部屋の中に入ってきた娘たちは、瞬く間に豆腐を作ってもてなし、途中の食糧まで用意してやった。老人はありがたい仙人の娘たちに重ね重ねあいさつをし、草屋を離れて夕方に村へ帰ってきた。ところが、朝まで確かにあった自分の家は影も形もなく、家の址に雑草とヨモギだけが生い茂っているだけだった。老人は隣の村にも行ってみたが、みな見知らぬ顔だった。村で一番長生きしているという家の主人を訪ねてみると、主人は老人の話を聞き終えて「当時の人はみな老いて死亡し、その子孫がこの村に住んでいます」と言うのであった。

そのとき初めて老人は、「昔話に仙人の世の中の一日は、人間世界の数百年にあたるとされていたが、私が九成洞谷間に入ってのんびりと楽しんだ一日の間に数百年という歳月が流れたようだな」とつぶやいた。それ以来、この老人が暮らした蓬田村は「ヨモギ畑村」といわれ、九成洞谷間の仙人である月明首座が大豆を植えて収穫した台地は「月明首座の豆田嶝」と呼ばれるようになったという。

海金剛

　海金剛は、江原道の高城郡と通川郡の東側の朝鮮東海岸に位置している。海金剛は金剛山の壮大で奇妙な地脈が海の方へ伸びて、潮水と海食、そして風雨と海風の風化作用によって形成された特異な自然景観地域である。

　西海の夢金浦、九美浦と共に朝鮮の海岸名勝となっている。

　海金剛の自然風景を特徴付けるのは、湖水風景と海岸および海底の風景である。

　三日浦をはじめ永郎湖、坎湖などが現出させる清新かつ幽玄な淡々たる風景は実に印象深いものである。そして、海万物相と叢石亭をはじめとする海岸や海底は、海水、海風、風雨によって洗われ削られて形成された奇岩の別天地である。

　普通、海金剛の景色について、父(外金剛の山岳)と母(内金剛の渓谷)の性格に似ていながらも、その固有の気質を持つ息子(海岸)と娘(湖水)の風格になぞらえている。

三日浦区域

三日浦区域は、三日浦とその湖水の島、三日浦の岸にある将軍台と蓬莱台、蓮花台、そして夢泉と金剛門、海珊亭址をはじめとする複数の名所からなっている。

三日浦は、昔、1日間遊ぶつもりで来たある王が、その景色に魅せられて3日間も遊んだとして名付けられた。三日浦は、面積0.78平方キロ、周り6.5キロ、長さ2キロ、幅0.4キロで、南北に長く伸びている海跡湖である。三日浦の周辺には高さ10余メートルぐらいの300ヘクタールに及ぶ竹林が広がっている。

三日浦の周辺には将軍台と蓬莱台、蓮花台などの展望台と臥牛島をはじめ海の景色にマッチする名所がある。三日浦の北側の山麓に夢泉という泉がある。伝説によると、一人の老僧がここに小さな寺を建てようとしたが、井戸がないのが大きな問題であった。芝生に横になって思いをめぐらしていた老僧は眠りに落ちたが、夢に白い

三日浦

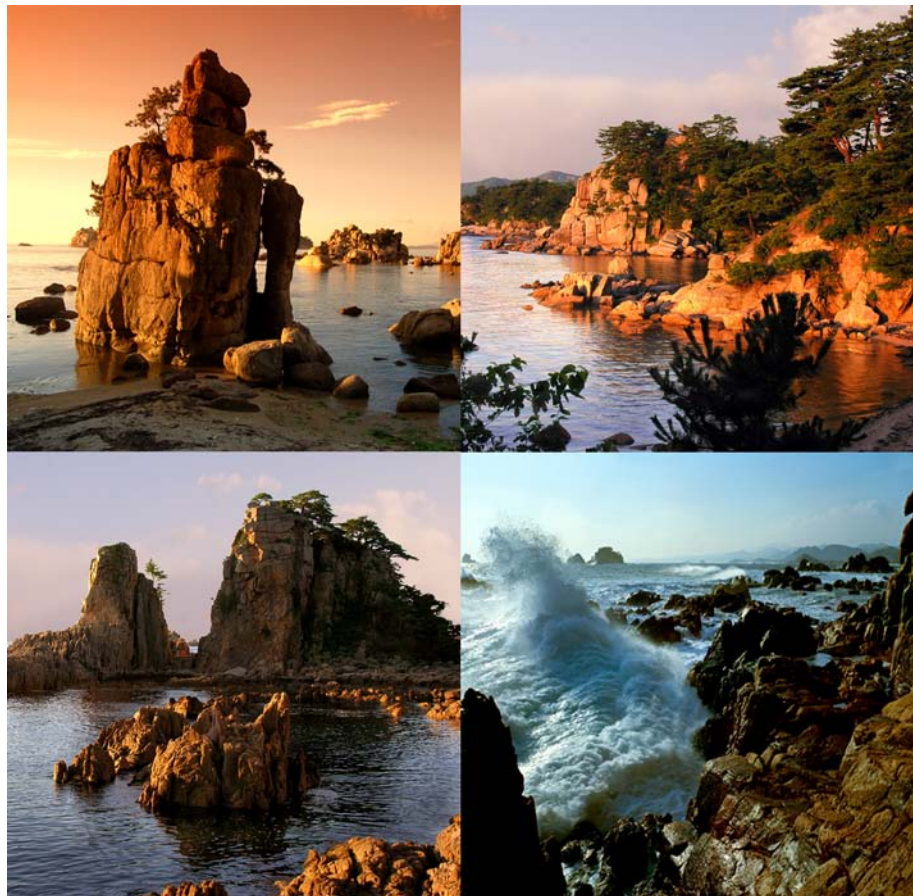
ひげを長く垂らした白髪の老人が霧に乗って現れて、左側の岩を指しながらその下を掘れば泉があるだろうと言った。夢から覚めた彼は、老人から教えられた通り、岩の下を掘ってみた。なるほど、清い泉が沸き、それを飲んで見ると、その味がかぐわしく、とても冷たかった。老僧は泉をきれいに手入れし、岩に「香洌夢泉」という四つの文字を刻んでおいた。夢泉から山へ100メートルほど上っていくと、小高い所に金剛門がある。殊に大きな二つの岩が向かい合っており、その上に1枚の平たい岩が屋根のように覆われて天然石門をなしている。高さ5～6メートル、幅1.5～2メートル、長さ4～5メートルで、金剛山の代表的な石門の一つである。この区域には、露積峰と函珀峰、単峰、エリュン峰、甑峰、9人の仙人が降りてきて踊りを踊りながら楽しんだという九仙峰(187メートル)などがある。

海万物相区域

海万物相区域は、高城郡海金剛里の前の水元端から南江の河口の下九峰城とその南側の永郎湖、坎湖にいたる東海岸の名所を包括する地域である。

この区域には、千姿万態の奇岩怪石でなされた万物相を海中に移したような海万物相と青い松林が茂った島、海跡湖があり、天下絶勝の海岸美を全て備えている名勝地帯である。昔から「海万物相を見ずには、金剛の美が知れない」という言葉が伝わっている。

海万物相は、海にそびえた

海万物相

海金剛の一部

さまざまな格好の奇岩怪石である。周辺の海底にはイガイ、カキ、ウニ、ナマコ、キンコなどが多い。

この区域には、天然記念物として指定されている海金剛門と数本の老松が青々と育っていて一幅の絵を彷彿させる立石、高さ50メートルほどの岩島の上に松林が茂っている松島がある。また、七つの石が北斗七星の形をした七星岩と獅子岩、夫婦岩、船岩、船頭岩と懸鐘岩のような岩柱があり、永郎湖、坎湖のような海跡湖がある。

叢石亭区域

叢石亭区域は、通川の叢石と金蘭窟など金剛山北部地域の東海名勝を包括する地域である。この地域の名勝の特徴は、海岸にそそり立った角ばった石柱と、海水の浸食作用によって岩崖に奇妙な洞窟が多いことである。

海岸の傾斜面には、数千数万の6角形の細長くて角ばった玄武岩石柱が海岸の約1000メートルの区間に立ち並んでいる。叢石の長さは15～20メートル、6角形の一辺の長さが0.9メートルに達するものもある。

青黒い東海に根をおろし、波に洗われながら特異な自然美を見せる石柱の中の洞窟はそれなりに神秘な伝説と共に異彩を放っている。叢石亭の日の出と月夜の景色は特別な情趣に富んでいるので、昔から有名である。周辺には天然石橋と夫婦岩、亀岩など多くの奇岩があり、岩の間ではウミツバメとウミカモが棲んでいる。

叢石亭

三兄弟の岩

叢石亭は通川邑の東側の沖合にある石柱群れである。

石柱がのんびりと横たわっているような形の臥叢、塔のような形の立叢、座っているような形の座叢などがある。

「叢石亭」にまつわる伝説

昔、叢石亭と国島が一目に見渡される通川地方の小さな村

に、善良で聡明な兄と妹が両親と共に仲良く暮らしていた。
ある日、海から日本侵略者が攻め込んできた。両親が日本侵略者に殺されて身寄りのない孤児となった兄と妹は、隣村の地主に雇われて下男と下女になった。苦役にさいなまれて何年が過ぎたある年の夏、兄と妹は朝早く家を出て深い山中で柴を刈っていた。途中、片手に杖を突き、白ひげを長くのばした白髪の老人に出会った。数十年もの間、金剛山で道術を修めたというその老人は、兄と妹に英知と勇猛を教えると言った。その後、兄と妹は暇を見て山に登り、その道士から剣術などいろいろな武術を学んだ。
このとき、村では海岸に石城を築き始めた。兄と妹もそれに加わった。兄は沖合にある国島に入り、大きな山を崩して6角に角ばった大きな石柱を切り出し、妹はその石柱を一つずつ運んで海岸に立てた。
ある日、島で大きな岩を切り出して叢石を作っていた兄は、国島に押し寄せる敵兵を見つけた。敵愾心に燃えていた彼は、工具を手にして敵の船にすばやく上がり、手当たり次第になぎ倒した。陸地でこの光景を見ていた妹も、兄が戦っている所へ駆け付けて敵をやっつけた。このとき、海の方から黒雲が押し寄せ、暴風と共に高波が発生して、敵船は全て水中に葬られた。敵と勇敢に戦った兄と妹も二度と帰れなかった。現在、国島の一角が剥ぎ取られたのは、当時、兄が山を崩して石柱を作ったからであり、その6角の石柱を妹が陸地に運んで立てたのが、ほかならぬ叢石亭となったという。

通川邑から東側に回って叢石亭へ行く峠から、臥叢、立叢、座叢を俯瞰することができる。
通川邑から0.5キロほど離れた所に穿島と東徳島、沙島などがある。この地域の見物はまた、通川郡金蘭里の北側の海岸にある叢石亭の端から東南側に約7キロ離れた所にある金蘭窟

である。高さ5～7メートル、幅3～4メートル、深さ15メートルのこの窟は、中に入るほど高くなるが、幅は5メートルから3メートルほどに狭くなるため、小舟に乗ってこそ入ることができる。
この金蘭窟には有名な「不老草」があるという。入り口の天井の斜めの岩の裂け目から下へ垂れ下がったまますくすくと育っているが、その長さは約30センチだという。
また、通川邑から12キロ(金蘭里から9.82キロ)離れた通川郡金蘭里の沖合に通川アル島の海鳥繁殖地として指定されているアル島がある。

洞庭湖区域

洞庭湖区域は、通川郡沖合の国島と鴨竜端から通川邑の間の金剛山北部地域の名勝を包括する区域である。
この区域には、国島と洞庭湖、天鵝浦、侍中湖などの名所がある。
洞庭湖区域では、小さな海金剛とも言える有名な国島の叢石の景色とハマナスが赤く咲いた砂場、鏡のように清くて静かな湖水でカモの群れが飛び交う湖水の風致を観賞できるばかりでなく、この地域に豊かな泥土資源を利用して療養治療も受けることができる。
国島は、通川郡慈山の沖合にある小さな島であり、周りは1.31キロ、一番高い所は41メートル、広さは約0.1平方キロである。
国島にはノニレ、ヌルデ、シベリアコリンゴ、桑が生い茂っている。中でも異彩を放つのは国島のヤダケと薬用ヨモギである。
島の3面は全て断崖であるが、所々にウ、アカアシウミガモ、ウミガラス、カモメなど数多くの海鳥が巣を作っている。
島の頂の展望台に上って眺めると、柱岩が層をなして塔のように立っており、象岩、オットセイ岩のような奇岩もあちこちにある。
洞庭湖は江原道通川郡の北部海岸地帯である群山里海岸にある海跡湖である。
周りは19キロ、広さは4.84平方キロ、深さは2.8～5メートルほどである。

洞庭湖は養魚、灌漑、文化休養などに総合的に利用されている。ここにはウグイ、マス、コイ、フナをはじめカムルチイ、ソウギョ、記念魚、タイ、ヤツメウナギなどの美味で栄養価の高い魚が群がっている。特にシジミが多く、観光客の食品としてよく利用されている。

治療によい泥土もあって、多くの観光療養客が訪れている。

天鵝浦は洞庭湖から南側へ少し離れた所にある海跡湖である。

この湖水は、北側の洞庭湖、南側の侍中湖と共に一つの海跡湖列をなしている。

周りは14.7キロ、広さは3.01平方キロ、深さは平均1メートルほどである。

天鵝浦という名称は、白鳥がここに来て越冬するので付けられた名称である。毎年10月末から翌年の4月まで白鳥がここに飛んできて冬を過ごし、再び飛んでいく光景は異彩を放つ。

湖水の周りには平野が広がっており、4キロ以上も伸びた狭くて長い砂場にはハマナスが咲き乱れて美しい自然風致を一層際立たせている。

天鵝浦は立派な治療療養地である。この湖水の下には砂と硫化水素からなっている良質の泥土が3～4メートルの厚さで積っている。

含水量が最も多く、いろいろな炎症や神経痛をはじめとする潰瘍、傷の治療に広く利用されている。

侍中湖もやはり海跡湖であり、周りは10.1キロ、面積は2.72平方キロ、深さは3.5～6メートルほどである。

果てしなく広がっている東海とその岸の曲り角にできた大小の石城を300メートルほど前にした侍中湖は、ひょっとすると海とつながっているように見える。

湖水を囲んだ小高い山には松林が生い茂り、湖畔に広がった白浜にはハマナスが満開してかぐわしい香りがする。秋になれば周辺の柿の木にたわわに実った柿が湖面に映され、それもまた絶景である。

湖水の東側の休息閣に上がり、涼しい海風に乗せられた波の音に耳を傾けながら、青くて清いことで有名な東海の水平線を眺めると、右島、松島、椒島、竹島、席島、昇島、白島の七つの島が点々と浮いている海の展望もまた素晴らしい。

侍中湖には海水浴場とボート場、釣り場などの文化休息施設が立派に整備されている。

侍中湖は、泥土治療場としてより有名な所である。

侍中湖の泥土は黒い灰色を帯び、臭いがなく、きわめて柔らかいのが特徴である。

これはいろいろな炎症性疾患と神経系疾患、そのほかの疾病の治療によい薬材となっている。

この泥土は絶えず生じてその源が引き続き補充されている。

56万6000余平方メートルに及ぶ広い区域を占めている侍中湖療養所には、泥土治療室、泥土製剤室、物理治療室、日光浴場など近代的な治療施設が整っている。

侍中湖にはコイ、フナ、ウナギ、ウグイ、ボラをはじめとする魚が多く、観光客のよい釣り場ともなっている。

金　剛　山

執　筆：張淑英、金根三
編　集：朴成日
翻　訳：金進赫、許京準
発　行：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発行日：2024年10月

ㄱ-240880231063

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

朝鮮民主主義人民共和国・外国文出版社
2024年